
Drプロットの恐竜教室(短編集)

香川景全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Drプロットの恐竜教室（短編集）

【Nコード】

N0980C

【作者名】

香川景全

【あらすじ】

僕、毛利隆史は岡の上小学校6年A組の生徒。なんだか知らないけれど、変な外人の先生が理科を教えてくれるようになった。何しろその先生は御茶ノ水博士のようなハゲ頭でトンボメガネをかけているし、鼻の下やアゴには太くて長いヒゲをはやしているんだ。ガリガリにやせててね、本当に背が高いんだ。だからいろんな所であたまを打ったりして大変なんだ。でもね、この先生の持っているバツクパツクがいいんだ。何でも出てくるし。まるでドラえもののポケットみたい。恐竜の授業って面白いよ。

第1話 ヒューイ登場

登場人物

Drプロット(ロバート・プロット)

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをか

けて、鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

舞台

岡の上小学校

6年A組

第1話

ヒューイ登場

「おっはよ〜」

月曜日の朝、僕、毛利隆史は元気に6Aの教室へ入った。

いつもは静かな教室なのに、なぜか今日はガヤガヤワイワイだ。

「これ、だれ？」

「外人だよ」

「どうしたの？何があるの？」

と、僕もみんなが騒いでいる方へと寄って行った。

そこには背の高い？いや足の長い外人が、弘子の机の下に黒いバツクパツクを置いて、それを枕にして眠っている。

頭はハゲていて両耳の上にだけ天然パーマの毛がぐちゃぐちゃになつてはえている。口の廻りのヒゲもはえ放題。

かけたトンボメガネも半分ぐらゐり落ちて、やっと高い鼻のところまで引つ掛かっている。着ている服も土臭くて何となく汚い。

「なんで、こんな所に外人の浮浪者がいるんだろう」

僕が言った時、ガラツと教室の戸が開いて教頭先生が入って来た。「みんな静かに！今日から新しい先生がこのクラスに来る事になっている。もう来ていると思っただけけれど。」

教頭先生のその声が終わると同時に僕達は寝ている外人を一斉に見た。

「えっ！これが？」

「まつさか」

「こんなハゲ外人が先生なわけないよね」

僕が小さな声で横にいた直子にささやいた時、ゴン！と大きな音を立てて、その外人が起きあがるうとした。

「オー、イタイ」

彼の口から出た最初の言葉だった。

「あつ先生いらつしてたのですか、じゃよろしく願ひしますよ」と、教頭先生は出ていった。

「じゃやつぱり、このハゲ外人が僕達の先生！」

僕が小声で言ったのを横の清子が

「シー」ととめた。

「いいよ、いいよ。僕から自己紹介するから」

と、その外人がよつこらしよつと起きあがりながら言った。

普通なら僕の声なんか先生に聞こえる筈は無い程で言ったのに。

先生はチョークを持って黒板に「クルー」と書いて

「僕はクルーだよ」

と言った。

そこで横の席の清子が

「起立！」

と掛け声をかけたので、僕達は一斉に立ち上がって

「クルー先生。おはようございます」

と挨拶をした。

「ハハハ、、、ちやうちやう僕はドクター・ロバート・プロットだよ。僕の言ったクルーとは新しい勉強を始める仲間と言つ意味だつたんだよ。」

と言つて名前を黒板に書いた。

僕達は外人の先生が日本語を話すので全員がホツとして席に座った。

「さてタカシ！ハゲてて悪かったね。それからナオコ！浮浪者みたいな服つて言つてたけれど、これは僕の制服みたいなものなんだよ。」

あれ！どうして先生は僕達の名前を知っているんだろう。今日、と言つよりか今会つたばかりなのに、、、まあいいか。

僕達はクシユンと沈んでしまった。

「ハハハ、まあそんなに気にはしてないけれどね。そうそう僕の制服って言ったけれど、本当はこんな所で教えるより外でホッティングをするのが仕事なんだよ。」

「先生！ホッティングって何ですか？」

「僕が手を挙げて聞いた。」

「オー、タカシ！いい事を聞いたね。ホッティングってのはね、化石なんかを探す事を英語で言うんだよ。」

「化石って、あの古い骨の事？」

「そう、死んだ動物の骨や植物なんかの事だよ。」

「え、気持ち悪い！」

「いつも静かな弘子が叫んだ。」

「そんな事は無いよ。じゃ、別のクルーを紹介しよう。」

「と言って、先生はバックパックのチャックを開けて中をかき回してラグビーボールぐらいの大きさの石を取り出した。」

「これは何かわかるかい？」

「石！」

「僕達は一斉に言った。」

「ハハハ、、、そう、石だよね。」

と、プロット先生は言っ、またバックパックに手を差し込んで一本のハンマーを取り出した。でも、、、そのハンマーは普通のハンマーと少し形がかわっている。お父さんが普段使ってるものとは確かに違った。釘を叩く方は同じだけれど、反対側は小さなスコップみたいだ。

「ちょっと見ててごらん。」

と先生は言っ、机の上に置いたその石をハンマーのスコップの様な側で軽く叩きだした。

コンコンコンコン、、、

「このハンマーはね、ホッティングハンマーと言っ、こういっ

先生は両方の手を顔の前で擦り合わせて、何かにお祈りをしてい
る。

僕は横に立っている清子にささやいた。

「先生はどうして僕の名前を知っていたんだろうね」

清子も不思議そうに思っていた様子で言った。

「そう、プロット先生が来てから、何か変よ、、、」

「さて、いいかね」

先生が床の真ん中へ歩いてきて大きく手を広げて言った。

「さあ、みんなモットうしろに上がって！」

先生は、僕達が不思議そうな顔をしているのを見て、少し考えて
「あつ、ごめん。うしろに下がってダツタ。さあ、ヒューイが大き
くなるから。」

僕達はそんな事はありませんかと思っ
ているから、直子が恐竜の骨
を指さして

「大きくなってる」

っと叫ぶまで誰も動かなかった。

本当にそれは大きくなっている。

机よりも大きくなった。

車よりも大きくなった。

そして天井に届くかなと思っ
た所で止まった。

勿論、僕達は先生に言われるまでもなく、一歩一歩と退いて、今
では壁に寄せた机の上にお尻を乗せるまで離れていた。

「わーあ、さっきの骨はわたしの家の一歳の犬ぐらいだったわよ。」

ひとみが名前と同じ様に目を大きくして言った。

「違つてしょ。生まれて一週間目か二週間目ぐらいの大きさだった
わよ。」

と弘子が叫んだ。

「でも今では、恐竜の骨のおなかに私が入るぐらいじゃない」

またひとみが言った。

「あっ、また！」

「ふるえてる！ゆれてる！」

清高が教室の隅で震るえながら言った。

「ははは、、、震えているのは清高じゃないか」

と僕が言った。

「何言ってるんだ。見てごらん君の足も震えてるじゃないか。」

実際、僕の足も立っているのがやっとの状態だった。

いつの間にか僕達は小刻みに移動して、全員が教室の片隅に、、、、恐竜のしっぽの方へとかたまってしまうていた。

「臭わない？」

「うん、臭くなってきたね」

「誰か、おならをしたでしょう」

「ひとみのおなら！」

「違うわよ！」

「うわあ、くさい！」

「あっごめんね。やっぱり少し臭うね。でもすぐに慣れるから、ちよっと、辛抱してね。」

プロット先生がみんなを見回して言った。

既にその時には骨だけだった恐竜に肉も皮も付いて、本物の恐竜に変身していた。

恐竜はその長い首をゆっくりと持ち上げて、ぐるぐると見回して顔をプロット先生に近づけた。

先生は恐竜の目をじ〜と見て、優しく言った

「僕は君のママじゃあないよ。ヒューイ」

恐竜は首をかしげて、今度は僕の方へその首を廻して聞いた
「本当？」

僕達は一言も言えず立ちつくしていた。

、
、
何しろ恐竜を見たのも初めてだし、恐竜に話しかけられるなんて、
、
、
しかも日本語で！

でも僕は震える足を両手で押さえながら、勿論、目は恐竜からは離さないで。みんな、僕達全員が最も知りたい事をプロット先生に聞いた。

「プロット先生！この恐竜は僕達を食べるの？」

プロット先生は両腕を組んでヒゲをなでながら言った。

「さあねえ、でももし君達がこのヒューイの事を知りたいのなら、彼に直接聞いてごらん。」

でも僕には恐竜に話しかけるなんて勇氣は無かった。何しろ両手は両足のふるえを押さえるだけで、顔はヒューイの目を見つめている。考えてみたらカツコ悪い姿だろうなあ。

横で僕の左手にしがみついていた清子が

「あなたは私達を食べるの？」

と、自分の身体を半分僕のうしろにかくして言った。

僕はやっぱり女の子は強いなあ、いつもの清子の強さを思い浮かべていた。

その声を聞いてヒューイが顔を僕達の方へ廻ってきて鼻先まで寄せてきた。すつごく臭い筈なのに、もう匂いなんて感じない。

ふるえは最大限になってきた。既にお尻は机の上に乗っかっている。でも清子が握っている僕の左腕に彼女の爪が食い込んでいて、少しは気持ちを抑える事が出来ている。

「あなたは草なの？」

と、ヒューイが聞いた。

「ちが〜う!」

僕達の真後ろで隠れていた清高が叫んだ。

「じゃあいらない」

と、ヒューイが言っつて首を元に戻したので僕達の緊張は少しだけゆるんだ。

「ヒューイは植物しか食べないハービバーと言う種類の恐竜なんだよ。」

と、横からプロット先生が言っつたので、僕達は全員がホーっときなため息をついた。

そうと判っつただけで僕の足の震えもとまっつた。でもまだ清子の爪は腕に食い込んでいる。

「あのお、痛いんだけど。」

今まで何とも無かつた様な顔をして、僕は清子に耳うちした。

「あっ!」

清子が小さな叫び声をあげ、顔を赤くしてパツと離してくれつたので、なんか全てから解放されつた様な気持ちになつた。

やっぱり強がつつても女の子は女の子だなあ。でも清子は僕のが好きなんじゃないかな。ふふふ、、実は僕も好きなんだけれどなあ。あつ、そんな事よりヒューイのことだつた。

先生が説明してくれつたんだ。

「ハービバーつて言う種類の恐竜はね、50cmぐらいの大きさから40mぐらいのものまで色々な種類があるんだよ。そしてね、二本足で歩くのもいるし四本足で歩くのもいる。でも大体大きな恐竜はこの種類に入るんだよ。だつてね木は大きく高く育つて行くだろう、そうしたら身体が小さければ食べ物に届かないから死んでしまわなくちゃならないだろう。」

もう僕達はゆとりでヒューイを見つめている。

「君の頭はちっちゃいんだね。」

と、清高も落ち着いてヒューイに言った。

ヒューイは長い首を廻して自分のしっぽから足まで見回して言った。

「そんなこと無いよ。僕には頭なんてないんだから。」

「何言ってるの！あなたは持つてるじゃないの。」

と、弘子が言いながら近づいて平手で頭をパンパンと叩いて

「ここに！」

と、言葉を続けた。

ヒューイは両目を寄せて

「僕には見えないよ。」

と言った。

「先生！」

僕が手を挙げて言った。

「少しバカなんじゃないですか？」

そうしたら弘子が目をむいて

「私の事をチキンヘッドって言うの！」

と、鼻息荒く言った。

どうして僕が発言するところなるのだろう。女の子は恐ろしい。

「ハハハ、、ヒューイの脳の大きさが豆粒ぐらいだと言っているんだよ。」

と、先生が助け船を出してくれた。

「そうして君が大人になった頃の脳は体重の40分の1ぐらいの重さだけれど、ヒューイの場合は5万分の1ぐらいだからね。」

と、続けた。

「でも、、、、そんな小さな脳で、、どうやって敵と戦う事が考えられるの？」

と、ひとみが控えめに聞いた。

「ヒューイはね、考える力なんて必要無いんだよ。」

僕が叫んでしまった。これが僕の悪い所なんだよなあ。頭で考えるより先に口に出てしまうんだ。でも、

「やろう、やろう。」

「新聞の名前は、、、」

「本にしよう。」

みんながワイワイガヤガヤで、今回はうまくまとまった。よしよし。

「オーケー、オーケー。そしたら最初の新聞は誰が編集長をやるんだい。」

「ぼく！」

僕は先生の言葉が終わる前に叫んだ。やれやれ僕の口め！

「先生！ヒューイが窓の外の植木を狙ってるう！」

清子が叫んだ。

ヒューイは教室の窓から首を出して植木の匂いを嗅いでいる。

「オーケー、タカシ、僕のバックパックを投げてくれ。」

と、先生が言ったので、丁度僕のうしろにあったバックを取り上げた。なんだ軽い。空っぽじゃあ無いのか？でも先生が言うのなら、四人ぐらい横の先生へ放り投げた、つもりだったがコントロールが悪かったのか弘子の頭にぶつつけてしまった。あの時の弘子の目は一生忘れられないだろう。女の子が怒ったらコワイ。

でも、カラッポのバックパックなんか当たっても痛くも無い筈なのになあ。

頭を押さえながら弘子が重そうに先生に、そのバックを渡した。

受け取った先生はすぐにチャックを開けて、一個のキャベツを取り出して一枚ずつはがして丸めてヒューイにやりだした。

変だなあ、あのバックバック確かにカラッポだったのに、、、本当に不思議な先生だ。

ヒューイは先生から貰ったキャベツを美味しそうに噛み砕き、ゴ

クンと音を立てて飲み込んでいる。たちまち全部のキャベツを食べてしまった。そして大きな大きなあくびをした。それはすつごく臭くって僕達は一瞬息をとめた程だった。

そしてヒューイは猫が自分のしっぽを追いかける様に大きな体を回し出した。

「みんなもつと広がって！」

先生が叫んだ。

言われなくても僕達は一足先にヒューイから離れていた。

見る間にヒューイは前足をおつて、続けて後ろ足をおつて床に座り込んだ。また大きなあくびをして目をつぶった。身体が右に左にとゆれている。そしてゆっくりと左の方へ横たわって行った。彼は身体を横たえる前に眠っていたんだ。

「さあ、今日の勉強した所を君達の新聞に書いて」

と、先生が言ったところで授業終了のサイレンが鳴った。

「じゃあタカシ。君が編集長なんだからちゃんとまとめておく事。

わかったね。」

「ハ〜イ」

「じゃあタカシ、ヒューイを僕のバックパックに入れてくれるかい。」

先生その言葉で僕達はヒューイを見ると、いつの間にか元の骨だけになっていた。

1話了 いかがですか？楽しめましたか？こんなバックパックがあったらいいだろうね。

第2話 化石

Drプロットの恐竜教室 第2話 化石編

登場人物

Drプロット（ロバート・プロット）

容姿 ハゲ頭でトンボメガネをかけて、鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。

やせて、背が高い。

教科 理科

専門 恐竜学

生徒 毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

舞台 岡の上小学校 6年A組

第2話 化石編

僕、毛利隆史は週に一度のプロット先生の授業が待ち遠しかった。
「おはよ〜」

いつもと同じ様に6Aの教室に入った。僕はびっくりした。
僕の机もイスも無い、もちろんみんなのもの。先週の授業の事を考
えて早く来た清高達が先に壁際やうしろへと片づけてしまっていた。
な〜んだ、みんなも僕と同じで待ち遠しかったんだ。

「キンコーン」

始業のベルが鳴ったのに先生は来ない。

「清高！君が机を片づけたりするから先生の寝るところが無くなっ
て来ないのじゃあ無いか。」

僕がちよつと強く言ったので、弱虫の加藤清高がべそをかいて、
「だって、、、、だって」

「ガラッ！ゴン！」

「あっ、痛い！」

と言いながらリンボーダンスの様に足を広げ、腰を落とし、天井
を見ながらプロット先生が入ってきた。

「日本の家は痛くて困る。」

と言つてハゲ頭を僕達の方へむけた。そこには3枚もバンドエイ
ドが貼られていた。

「しかし、今日はどうしてみんなは立っているの？」

「だって、どうせ片づけるでしょう。」

僕が言った。

「残念でした。今日は最初にお話をするから元通りに戻して。」
僕達はな〜んだって顔をして机とイスを元に戻した。

「起立！礼。プロット先生、おはようございます。」
学級委員の大内清子の声でいつもの朝の挨拶だ。

「はい、おはよう。さて今日は先週の続きでヒューイが生きていた頃の話しよう。みんなジュラシックパークを見たかい？」

「はい。」

全員が一斉に手を挙げた。

「そうかじゃあイメージは出来ているね。そうしたらその話は後にして、恐竜はいつ頃発見されたか勉強してきた子はいるかな？」

「はい。」

どうしてだろう。頭で考えるより勝手に僕の手が挙がる。しかも勉強なんて一番嫌いだから予習なんてしたことも無いのに、、、

「オー、タカシすごいね。どんな勉強をしてきたのかみんなに話してくれるかい。」

「はい、一番最初にメガロザウルスを発見したのはイギリスのウィリアム・バツクランドと言う人で1824年に発表してます。」

みんなが目を丸くして僕を見ている。

でも、、、

僕もこんな事は知らないのに勝手に口がしゃべっている。

「そうだね。よく調べてきたね。でもね、それより2年前にお医者さんの奥さんが同じ様な骨を見つけているんだ。それにしてもタカシは勉強が嫌いなのに偉いねえ。みんなに隠れて日曜日に図書館へでも行って勉強してきたのかな。」

僕はもう何もかも訳が分からなくなってきた。でも、誉められるのも悪くは無いなあ。

「恐竜新聞の編集長じゃなくて恐竜博士にしよう。」

清子が叫んだ。

「そうだ、そうだ。」

「隆史は恐竜博士だ！」

「ハハハ、、、タカシは恐竜博士か。そうしたらこれからみんなに色々調べてきて教えなくちゃあいけないなあ。」

先生が僕の横へ来て頭をなでながら言った。

へへへ、、、なんか知らないけれど 変な事になったなあ、でも、まあいいか。

「じゃあ話の続きをしよう。さつきタカシが1824年の話をしたけれど、実はね1677年に僕がメガロザウルスの大腿骨つて足の骨だけど見つけていたんだよ。でもね、そのころは恐竜が実在したなんて考える人は居なくて1800年代の中頃まで、その骨は大男の骨だなんて言われてたのさ。だから本当は僕が世界中で一番最初に恐竜を見つけたんだよ。まあその時はこんなハゲ頭ではなかったけれどね。」

「いったい先生は何を言っているんだろう。だって先生は40歳ぐらいにしか見えないのに、、、」

でも、、、まあいいか。

でも、なぜだろう。みんなはウンウンとうなずきながら聞いている。

「だからね、恐竜が発見されて学問として出来上がったのは150年ぐらい前からなんだよ。何が言いたいかと言えば、、、そんな短い間に見つかった恐竜なんてまだ数える程しか無いから、新しく見つかるたびに歴史が変わっていくんだ。だから僕が教える事も明日にはウソになっていくかも知れないって事を先に知っておいて欲しかったんだ。わかった？」

「はい」

みんな揃って返事をしているけれど本当にわかってるのかなあ。

僕はわかるけれど、、、「じゃあ今日はこれでおしまい。」

「え、何で？」

「何も勉強してないじゃん。」

僕と多古弘子が同時に叫んだ。

「エッ！何もしなかったっけ」

「頭を打っておかしくなっただんじやない」

島津直子がコソツと言った。

「オー、ナオコ！そつだよ。頭を打ったから忘れていたんだ。ごめんごめん。」

先生はどんな耳を持っているんだろう。誰にも聞こえなかったのに。

「えーつとメモメモ、」

と言つて自分の左の手のひらを眺めている。僕がそつと立ち上がつて見たけれど、何も書いてなかった。

「あつソウダ！」

先生は小さくうなずいて頭の絆創膏を一枚はがして言った。

「ここに書いてあつたんだ。」

普通バンドエイドにメモするか、、、、変な先生。

「そつだそつだ、化石を勉強するんだつた。今日は化石がどの様にして出来るかを考えてみようね。」

言いながら先生はバックパックのチャックを開けてゴソゴソと何かを探している。取り出した物はジャーン！

なんだ単なるチョークだ。

僕もみんなも期待して先生のバックパックを見つめていたのに。

続いて取り出したのがヒューイと同じ様なプラスチック製の小さな恐竜だ。これがまた大きくなるんだと、僕達はワクワク。

「この恐竜はね、今、岩が落ちてきてね、それにあたって死んだんだよ。」

と言いながらプロット先生が頭からしっぽまでをゆっくりとなでるとプラスチックだったのが、本物の恐竜が横たわっている様になつてきた。

僕達はみんな席を立てて先生の廻りに集まつた。

ふと見るとチョークが勝手に黒板に水槽の絵を描いている。

底には土が入っていて半分ぐらい水が入っている。

プロット先生はその中に手にした恐竜を静かに入れた。

恐竜はゆっくりと水の中を落ちて行き、身体の横半分ぐらい土の

中に埋もれて横たわった。

「みんなよく見ているんだよ。」

先生が言ったとたんに水面にさざ波が立ち始め、それが目にも見えない程の早さで動き出した。でも恐竜の廻りの水は動かない。

「あつ、しつぽの方から骨が見えてきた。」

「おなかの骨も見えてきた。」

「土が増えてきたね。」

みんなそれぞれ勝手にしゃべっている。

恐竜が骨だけになった時、それは総て土の中に埋もれていた。

更にそれから何層にも土が乗っかっていく。最後には水がなくなつて、土だけになった。

一番底の層に恐竜が横たわって埋もれているのが見える。

「どうだね、判ったかな？これは数百万年もの間をVTRの早送りみたいに、みんなに見て貰ったんだけど、、、こう言う風にしてゆっくりと化石になって行くんだよ。」

言いながらプロット先生はバツクパツクを引き寄せて

「これは少しおいておいて、、、変な日本語、、、ちよつとこれを見てくれるかな。」

取り出した物はやっぱりプラスチックのおもちゃだ。

先生はそれの羽根を優しくこすってやってから空中へと放り投げた。

「キヤー」

清子が頭を押さえて叫んだ。

それはコーモリみたいな羽根を持っていて顔は恐竜で、しかも大きな長いくちばしを持っている。

飛び始めてすぐ清子の頭にある髪止めが気に入った様子で、清子の頭を襲ったんだ。

教室をぐるぐると一周して帰ってきた所をプロット先生がつかまえると元のおもちやに戻っていた。

「これはプロテロザウルスと言う名前だよ。でもこれはダイナソアじやあないんだよ。」

と、プロット先生は言いながらそれをバツクパツクにしまい込んだ。

「でも何とかザウルスって言うんだから恐竜でしょう。」
僕が言った。

「そうだね、よいところに気がついたネ。タカシ！でもねダイナソアは空を飛ばないんだ。日本では何でもまとめて恐竜って呼んでいられるけれどね。これはフライングレプタイルと言ってねダイナソアじやあないんだ。」

と言いながら先生は、またバツクパツクから一つのおもちやを取り出した。今度はヒューイみたいな形をしているからダイナソアだ。見るとチヨークが別の水槽の絵を黒板に描いている。

その間、プロット先生はニコニコしながら手にしたおもちやをさすってやっている。

しばらくして半分ほど水が入ったその水槽のなかへとそろっと、その恐竜を入れてやった。少しの間、それは水に浮かんでいたが、ゆっくりと潜って泳ぎ始めた。

「わあ、これも生きてるじゃん。」

「かわいい〜。」

僕達は口々に言いながら黒板の水槽の方へ行った。そこへプロット先生の手がにゅーっと伸びてきて、その恐竜をつかんで水槽から出した。

とたんにそれは元のおもちやに還っていた。

「さあ、これもダイナソアじゃあ無いんだよ。」
手を拭きながらプロット先生は僕達に言った。

「じゃあ、先生、ダイナソアって何ですか？」

また、僕の口の出しゃばりめ！

「ははは、そうだねタカシだけじゃなくてみんなもちよつとこんがらがって来たんじゃないのかな。前にも言ったと思うけれど、ダイナソアって大きな変なトカゲって言う意味だから、空も飛ばないし、海でも泳がないんだよ。だからこれはマリーニレプタイルって言うんだ。日本では分類していないから空を飛ぶのを翼竜、海で泳ぐのを海竜としておこうかな。」

手にしたおもちゃをつまんでみんなに見せながらプロット先生は言つて、バツクパツクの中へそれを放り込んだ、が、思い直したのか又、手を突っ込んで、今度は小さなスコップを取り出した。スコップが今度はどうなるのだろうかと僕達は一齐にそれを見た。

「もうそろそろ出来上がっている頃だから、キヨタカ！これで恐竜の上に乗っかってる土を外へ出してくれるかい。」

「はい」

清高が大きな返事をしてスコップをつかんで黒板へと向かった。なぜか清高が掻き出した砂や土がタンクから外へ出ると消えてしまふ。でも恐竜の骨の上の層までは確実に無くなって行つてる。

コツンと音がして清高の手が止まった。

「先生！固くてスコップじゃ掘れません。」

「よしよし、うまく出来上がった様だな。ちよつと貸してごらん。」
清高からスコップを受け取つて柄の方をコンコンと打ち付けるとスコップの先がハンマーに変わっていた。先週に見た例のホツシキングハンマーだ。

「さあ、これで骨の廻りの岩をコンコンと叩いてごらん。」

清高がそれを受け取つて先生に言われたとおりにやった。すると恐竜の廻りの岩がきれいにひび割れた。

「うまいぞ、キヨタカ、ヨシヨシ、ちよつと僕と替わってくれるかい。」

と言ってプロット先生は水槽（と言っても元は水が有ったが今は無い）の中へ両手を入れて清高が割った石を持ち上げて机の上へと置いた。

そうして、又ハンマーでコンコンと軽く全体を叩いて、バツクパツクからはけを取り出して掃除をした。

「こういう風にして骨だけが表面に出る様にしてごらん。まずキヨタカ、口で上のゴミを吹き飛ばしてね。」

清高が2、3度繰り返し返すと恐竜全体の化石が出てきた。

「ワーオ」

僕の口から出た言葉、、、

「僕にもやらせて！」

「私にも！」

「ワーオ、僕達の化石だ！」

「そうだね、これはだいたい1億2000万年前の恐竜だよ。ジャ、今日の勉強した所も新聞に書いておいてねキヨタカ！来週は、、、来週は、、、エーッ、どこにメモしたかな、あっそうだ。」

と言いながらプロット先生は頭の絆創膏を、また一枚はがして「来週は恐竜たちが生きていた時代を勉強しようね。今度はみんなにも発表して貰うから、家で勉強してきてね。」

と言いながらプロット先生は僕達の化石をバツクバツクにしまい込んだ。

第2話 化石了

どう？化石になるのがわかったかな？次のお話をもっとDRプロットの魔法を書きますからね。
お楽しみに。

第3話 地球

Drプロットの恐竜教室

Drプロット（ロバート・プロット）

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをかけている。

鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。
やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学

舞台

岡の上小学校 6年A組

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

第三話 地球

毎週日曜日になると友達と走り回っていた僕、毛利隆史が、昨日の日曜日は朝からノートやペンを用意して図書館へ行って勉強してくるって言ったものだから、お母さんは慌てて外へ飛び出して空を眺めて雨になるかなあなんて言ってた。むかつくなあ。

でも今日は楽しみみなプロット先生の勉強だ。

「おはよ〜」

いつもと同じ様に6Aの教室に入った。

なんで? どうして?

みんな僕の事なんか無視して静かにノートを広げて一所懸命に勉強してる。

くそ〜負けたかな!

「ん〜」

「いて〜!」

いつもの様に先生が入ってきた。毎回頭を鴨居にぶつけて入ってくる。どうも学習能力に欠ける先生みたいだ。

「起立! 礼! プロット先生おはようございます」

「はい、あ〜いて〜、おはよう」

「先生! それどうしたの?」

菊池ひとみが大きな目を更に丸くして指さして、大きな声で聞いた。

「似合わな〜い」

「かつこ悪〜い」

みんながそれぞれに言っている。

「ああ、これか。ホームステイしている家の人が貸してくれたんだ。背広姿もいいと思っただけれど、、、だめかあ？」

「プロット先生には、似合わないよ。だってズボンもちんちくりんだしさあ」

「上着だつて半袖みたいじゃん」

「やっぱり、僕も本当は嫌だったけれど、近所の人に乞食の外人が居候してるなんて言われたらしいんだ、、、。まあ、とりあえず上着は脱いで、、、と。さあ、今日は何からはじめようか？」

「先生が、恐竜たちが生きていた時代を勉強するって言ってたから、昨日は図書館で勉強してきたんだぞ」

僕が一番に口をとがらせて叫んだ。

「ああ、そうだそうだったねえ。タカシ偉いぞ！勉強してきたか。」
先生が僕の机の横まで歩いてきて頭をなでくれた。ゴロニヤン。

「タカシだけじゃないわよ。私もよ」

「僕も！」

「私も！」

みんなが口々に言った。なあんだ、みんなやっぱりなあ。くそくそ「よし、判った。じゃあタカシから何を勉強して来たのか発表してくれたまゝえ。」

変な日本語、と僕は思ったが、

「はい、僕は昨日、図書館へ行って恐竜達を調べてきました。ヘレザウルスやメガロザウルス。それに、えくと、クロノザウルスなんかをみてきました」

僕は得意そうに言っただけれど、誰も何も言わない。

「ん、タカシよく勉強してきたね。でも、その恐竜達が生きていた時の地球なんかも調べて欲しかったね。」

プロット先生がヒゲをなでなでしながら言っ

「他にも勉強してきた人！」

と続けた。

「ハイ」「はい」

「じゃあ、キヨタカ。次は君の番だ。」

ちよつと、インテリの清高は、ちらつと僕の方を見て得意そうに話し出した。

「はい、僕は先週隆史が言った恐竜を最初に見つけた人々の事を調べてきました。1822年にマリーマンテルと言う人がイグアナドンの骨を見つけていますが1809年にも別の誰かも見つけていました。そして先生と同じ名前の人もありました。」

ふん、なんだ、ちよつと頭が良いからって先生のごまなんかすっちゃって、、、クソ。

「キヨタカ、よく調べてきたね。よしよし、じゃあ今日はタカシの調べてきた恐竜を考えながら、その恐竜達が生きてた時代の地球を勉強しよう。」

と、プロット先生は言いながらバックバックを引き寄せた。

「フッフ、地球でも入っていると思っただろう。」

僕達はそのバックバックに見入っているのを察知して先生は笑いながらチヨークを取り出した。

「さあ、地球はいつ頃出来たか調べて来た子はいるかな？」

シーン

「ははは、これを調べてきた子はいなかった様だね。じゃあここから勉強に入ろう。今まで色々な偉い先生達が、色々な年代を考えていたんだけど、現在の科学者達が言っているのでは46億年前に我々が住んでいる地球や太陽の廻りの惑星などが出来たんだ。チヨークを見ててごらん。その時から現在までの事を書いてくれるから。」

先生のその言葉が終わるとすぐ目にもとまらない早さでチヨークは黒板一杯に字を書き始めた。

「こら！字ばかり書いたら訳が分からなくなるじゃあないか。」
先生がチヨークをしかつた。そうしたらチヨークは線を引き始め、それぞれの年代で区切っていた。

「よしよし、これで判る様になった。」

でも、僕達にはさっぱりわからない。数字とカタカナばかりだ。「これが地球の歴史年表だよ。わかるかなあ。じゃあ説明するよ。まず、左端の46億年前が地球が出来た時で、一番右の端が今の世の中だよ。ここまではわかるかい？」

「はい」

僕達全員で返事をした。

「よしよし、そこで一番古い化石が発見されたのは38億年前のこのあたり、ついでに生き物で一番古い化石が見つかったのは、このあたりの5億8000万年前の物だよ。これはオーストラリアのフリンダース山脈で2003年の10月に見つかっているんだ。」

プロット先生は黒板の年表を指さしながら言つて、僕達の顔をゆつくりと見回して言葉を続けた。

「まあ、みんな判つた様だから、、、話を続けるけれど、、、生き物が生きている時代を大きく3つの期間に分けているんだ。でも恐竜が生きていたのは2億4500万年前から6500万年前までの中世代だけだから、僕達の勉強はこの期間だけにしよう。」

先生がそう言つとチヨークは勝手に中世代以外の字と数字を消し始めた。

「さあ始めよう。この中世代も大きく3つの時代に分けているんだ。」

チヨークが又、忙しそうに中世代を3つに分けてそれぞれの年代と名前を書いた。

「さつきタカシが調べてきたと言ってたヘレヤザウルスは、この最初の三畳紀に住んでいたんだよ。でもねヘレヤザウルスって言ったら他の国の人には通じないからヒューラーザウルスと覚えようね。これは長さが2mぐらいだから人間と同じくらいの大きさだけれど、同じ時代のイイオラプターなんか小さくて1mぐらいの大きさしか無いんだよ。でもプレテイオザウルスなんかは大きくて8mもあるからすごいけれど、大きいのはだいたい植物イーターだから逆に小さい恐竜の方が恐いんだよ。」

と言いながらプロット先生は黒板に恐竜の名前を書いた。

「じゃ、ヒューイもプレテイオザウルスだったんだ。」

僕が言った。

「そう、よく覚えているね。じゃあ植物イーターの恐竜達の事を何と言ったかな？」

「ハービバー！」

僕達は全員が口を揃えて叫んだ。

「すごい、みんなよく覚えたね。じゃ、肉食恐竜は？」

「カーニボー！」

約半分ぐらいの僕達が叫んだ。

「ハハハ、まあいいか。じゃあ次のジュラ紀の勉強をしよう。」

タカシが2番目に言ったメガロザウルスは、このジュラ紀に生きていたんだよ。二本足で歩いて高さは3m。長さは9mもあるんだよ。そして歯はノコギリの刃の様に1本1本がなっているんだ。ジュラシックパークの映画をみんな見たって言ってたから感じは判るよね。」

「はい」

「じゃあ次は1億4500万年前から6500万年前の白亜紀だ。」

日本ではこの期を白亜紀って名前を付けているけれど、クレタシアス期と覚えた方がよいよ。何故かって？だってこれから君達が大き

くなつて外国の本なんかを見る様になつた時、こんがらがつて判らなくなるからだよ。話しが変わつちやつたけれど、、、、なんだつたっけ、、、、あつ、そうそう、白亜紀だ。さつきタカシが言つたクロノザウルスは、この時期のものでオーストラリアのクイーンズランド州で完全体の化石が発掘されているんだ。でも、これはダイナソアじゃ無くて海の中に住んでいたんだ。さあ何て言つたかなあ？」

「マリンレプタイル！」

先生が言つたとたんに僕が叫んだ。フッフ、、、、

「すごい隆史！」

「さすが恐竜博士！」

みんなが叫ぶのでちよつと得意になつてきた。

「タカシ！よく覚えているね。空を飛ぶのはフライングレプタイルだつたね。これも勉強したね。」

「はい」

ちよつと頭の中がこんがらがつて来た僕達は、それでも小さな声で返事をした。

「おいひとみ。今日の勉強つて、なんにも出てこないから面白く無いなあ」

僕が横の菊池ひとみに小声でささやいた。

「ハハハ、少し今日は難しかったかなあ、やっぱり見た方が良さそうだね。」

と先生は言つてバツクバツクから青い風船を取り出した。

「やったー！成功！だつて先生はどんな小さな声でも聞き取るから、僕の送つた信号にすぐ反応をしただろう。フッフ。」

「ちよつと真ん中の6つの席を空けて広さを作つてクレル？そしてこれを一番元気なタカシ、君が膨らませてくれ！」

とその風船を投げた。それは確実に僕の上に届いた。すごいコン

トロール！

僕達は立ち上がってワイワイガヤガヤと言いながら空間を作った。

「ヨシヨシ充分だ。じゃあタカシふくらませて。」

と、プロット先生が言ったので、僕は大きく息を吸い込んで、それをふくらませた、幾ら吹き込んでも幾らでも入る。机4つつ分ぐらいの大きさになった時、先生が

「もうイイダロウ」

と言ってくれたので僕は助かったって気分になったぐらいだ。

先生はそれを空間の真ん中に置いて

「これがなんだかわかるかい」と聞いた。

「地球で〜す」

全員が叫んだ。

「でもちよつとおかしいです。この地球は陸地が一つしかありません。」

ひとみが少し控えめに言った。

「そっだよ、そっだよ」

「変だよ〜」

みんなが口々に言うのを、大きな手を広げてプロット先生は

「ワカツタ、ワカツタ。でもね、これが昔の地球なんだよ。今勉強した約2億2000万年ぐらい前の三畳紀はパンジエーラ大陸と言つて世界はこれだけだったんだよ」

と言つてバツクパツクを取り上げ、手を突っ込んで大きな虫眼鏡を取り出して

「ジャ、これで見てください」

と、ひとみに渡した。

「すごい、恐竜がたくさんいるわ！」

「え〜貸してかして！」

どうしてなんだらう、僕はすぐに反応する。

「本当だ動いているよ」

「ちよつと貸してごらん」

先生が言つて、その虫眼鏡を片手でこするとレンズが大きくなつて地球の三分の一ぐらいをカバーする様になつた、しかも、手から放れて宙に浮いている。

「これでみんなが見られる様になつただろう。」

「あつ、ヒューイがいる。」

「どこ、どこ」

「プレテियोザウルスだね。何をしているかヨク見てごらん。」

と、プロット先生が言つたので、僕達はプレテियोザウルスばかりを探した。

「みんな幸せそうに木の葉っぱを食べてるわ。」

ひとみが言つたとき、横にいた清高が

「あつ、違う種類のが近づいて来た！」
と叫んだ。

「ヘアエアラザウルスだよ。見てごらん。」

先生が指さして言つたのでみんなが一個所に集まつた。

「プレテियोザウルスは知らん顔だね。」

「あつ、ずいぶんと集まつて来たよ。」

「ヒューイ！危ない！」

「ずいぶんと小さいなあ」

「あつ、一匹が足に噛みついた。」

それでようやく気がついたプレテियोザウルスが大きくて長いしっぽを廻して来てヘアエアラザウルスを跳ね飛ばそうとした。

別のが左後ろの足に噛みついた。しっぽに噛みついたやつもいる。

でも、しっぽが動くから同じように振り回されている。

別のが飛び上がったのにも噛みついた。

「ヨシ、じゃあ三疊紀は、このぐらいにしておいて、次のジュラ紀に行くよ。」

とプロット先生は言つて地球のてっぺん、北極か、の所に人差し指をあてた。すると地球はものすごい勢いで回りだした。しばらくして

「そろそろイイダロウ。」

と言つてまだ廻つてゐる地球の上に同じように人差し指をあてた。すると地球の回転がゆっくりとなり、元の様に虫眼鏡で見ることが出来るようになった。

「あつ、今度は陸地が2つに別れている。」
と、菊池ひとみが叫んだ。

「ソウ、この時代にはパンジエーラ大陸が分裂して Gondwana 大陸とローラシア大陸とになつてゐるんだよ。よく見てごらん。」

先生が言つたので、僕達は又虫眼鏡をのぞき込んだ。

「あつ、ここにもヒューイがいるわ!」

弘子が言つたので

「どこどこ! 違うよ! ヒューイの背中にはこんなトゲは無かつたよ。」

「

またまた僕が反応した。

「オー、よく気がついたねタカシ! これはディプロドコーカスと言つて、大きいのでは27mもあるんだよ。アツ、そうだ。面白い事にこの恐竜の足跡の化石に前足だけで歩いたと言つのが有るんだよ。なぜだかワカルカイ?」

プロット先生が楽しそうに言つたけれど、誰も何も言わない。

「逆立ちして歩くダイナソア!」

又、僕だ。僕の口め!

「ははは、タカシの発想はすごいねえ。学者でも考えなかつただろうなあ。実はね、この種類もハービボーなんだヨ。そして敵が来たときには背丈があるから浅い海と言つても20mぐらいの深さの所まで逃げられるだろう。もし小さなカーニボーが追いかけてきてもおぼれてしまつし、このディプロドコーカスは少しは水に浮く

んだ。でも泳ぐことは出来ないから前足を海底に着けて歩く。判った？」

「はい」

みんなは大きな声で返事をしたが、僕は誉められたのかけなされたのか判らないから小さな声だ。

「あつ、これ面白い！新幹線の新しいのぞみ号の前みたいな顔してる。」

また、弘子が新しい発見をしたみたいだ。

「どれどれ、どれだい？」

僕が一番に反応する筈なのに今回はプロット先生が一番だった。

「へへ、新幹線のものぞみ号ってこんな顔をしているのか。知らなかった。これはねバーロザウルスだよ。アメリカのソルトレイクシティのミュージアムに26mもあるスケルトンが展示されてるよ。そうか、、、のぞみ号か、、、」

ヒゲをなでつけながらプロット先生は言葉を続けた。

「なぐんだ先生、新幹線に乗った事無いの？」

またまた僕の口だ。

「そうなんだよ、ホームステイ先と学校しか知らないんだ。タカシ、今度先生を案内してくれるかい。」

「はい」

今度は大きな声で返事した僕、実は勉強のお手伝いはチョットだけれど、それ以外ならおまかせの僕だ。

「先生、この小さいヒューイに似た恐竜も背中にトゲがあります。これってさっきのディプロドカスの子供ですかあ？」

虫眼鏡をのぞき込んでいたひとみが小さな声で聞いた。

「アッ、それはねディプロドカスでもプレテリオザウルスでも無くて、エーソト、、、ステゴザウルスって言うんだ。変な名前だろう。デモすぐ覚えられるよね。首がディプロドカスなんかとちが

つて短いだろう。このステゴザウルスは歯の化石なんかから柔らかい葉っぱや植物しか食べないってことが判っているんだ。長さは9mぐらいだから、ヒトミが言ってる見たいにディプロドカスの子供見たいに思うよねえ。でも、よく見てごらん、しっぽに4本のスパイクがついているだろう。これで襲ってきた敵をやっつけるんだよ。」

先生は別に、地球をのぞき込もうともしないで説明を始めた。

「同じ様なのにブラキオザウルスなんかもあるよ。この時代にはドラリオザウルス、アロオザウルスや、色んなフライングレプタイルなんかもいるだろう。よく見てごらん。」

「前のえくと、三疊紀には赤土の山なんかばかりだったけど、このえくと、ジュラ紀には緑のジャングルみたいになっているわ。」

普段でも植木や花の好きなひとみがつぶやく様に言った。

「ソ！そうだよ。ヒトミよく気がついたね。この頃は地球全体が暖かくなったのかも知れないね。ジャア次の時代も見てみよう。」

と言いながら先生はまた、北極あたりに人差し指をあてた。地球は又回転速度を速めた。

「危ないから少し離れていた方がイイヨ。」

先生に言われるまでもなく僕達は回転する地球から遠ざかっていった。

「サテ、もういいだろう。」

小さな声で数を数えていたプロット先生は言って、同じ様に指を地球の頂点（やっぱり変だなあ、北極点）にあてて回転を遅くして言った。

「サア、もう中生代の最後の白亜紀だ。サア、みんな覗いてごらん。そして気付いた事を聞かせてくれるかい。」

僕達は地球の周りに集まって一斉にレンズをのぞき込んだ。

「あつ、花が咲いているわ！」

一番にひとみが叫んだ。なんだよお、一番は僕の専売特許なんだぞ。

「鳥も飛んでいるよ。」

「先生、フライングレプタイルの羽根が長くってグライダーみたいですよ。」

「うー清高め！僕も気づいていたのに先に言われた。」

「そうだね、みんな色々気づいた様だね。もうこの頃になると色々な動物や植物が進化して以前とは姿が違っていているんだよ。」

「あつ、ヒューイが泳いでいる。」

「本当だ！」

「おいおい、先生が説明してくれているのに直子や弘子が勝手に叫んだ。」

でも、あれはマリーンレプタイルだから違うのに、

「それはよく似てるけれど、今、タカシが考えている様に、プレシオザウルスって言ってマリーンレプタイルだよ。」

「な、なんでや〜僕の頭のなかを先生は見れるのか？そしてどうしたの？みんな不思議に思わないでうんうんって納得すんなよ〜」
「考えてみたらヒューイと名前もよく似てるね。さあ、それ以外に前と変わっている所を探した子はいるかな？」

先生が言ったので、僕の手が勝手に拳がった。

「オツ、タカシ、何に気がついたのだい。」

「え〜と、〜、えーと、〜、そうだ！陸地がたくさん島の島に別れています。何か今の地球に似てきました。」

「タカシよいところに気がついたね。たぶんみんなも気づいていただろうけれど、地球が回っている間に何億年も時代が進んだので、ゴンドアナ大陸からアフリカや南アメリカやインドが分裂していったんだ。パンゼーラ大陸からは北アメリカやヨーロッパ、アジアが分裂しているだろう。でもそれぞれの島に見える土地の間の海はシャローシーといって深さが0mから60mぐらいの浅い海で、

又もつと時代が進むとそれらがくつついたり離れたり、そして隆起や陥没を繰り返して今の地球が出来上がっているんだよ。」

「じゃ、恐竜達がエサを探すのに海があったらこまるじゃん。」

又、僕の口め！勝手にしゃべるな！

「そうだね。恐竜達の住んでいる島に食べ物が無くなったらどうなる？」

「死んでしまいます。」

こら、ひとみ！僕より先にしゃべるな。

「そう、ハービボー達が死んでしまったら、今度はカーニボー達も死んでしまうよね。さあ、来週は恐竜達がどうなったかを勉強しよう。じゃ、今日はこれでおしまい。恐竜新聞に書いといてね。」

プロット先生はそう言いながら手に持った針を地球に突き刺した。とたんに地球はすごい勢いで教室中を飛び回り、先生のバックパックスの中へ吸い込まれて行った。

第3話 地球了

こんな地球が欲しいなあ。

第4話 恐竜のしっぽ（前書き）

御好評いただきましたので4話目を考えてみました。
お楽しみください。

第4話 恐竜のしっぽ

第4話 恐竜のしっぽ

登場人物

Drプロット（ロバート・プロット）

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをかけている。
鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。
やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学

舞台

岡の上小学校 6年A組

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子
多古弘子
菊池ひとみ
平賀和也

第4話 恐竜のしっぽ

「今日はいつもと少し違う勉強をしよう。」

プロット先生が授業開始と同時に言った。

いつものように頭をゴツンとぶついたりが無くて、真面目くさって言うものだから、僕達はビックリした。

だから別の怖い先生の時みたいに、みんなは背筋を伸ばして先生の次の言葉を待った。

でも先生はいつものように黒いバックパックを持ち上げてチャックを開いた。

「なーんだ、先生はあんな事を言ったけどいつもと一緒じゃん。」
僕が横の清子にささやいた。

プロット先生が取り出したのは普通のオーバーハング・プロゼクタ
ーだ。

なーんだ、つまんないの。

今日は本当の勉強なんだ。

「さあいつものように机とイスをうしろと壁の方へ寄せてくれるかい。」

「えっ先生、立ったままで勉強するんですか。」

またまた僕の口め！勝手にしゃべるな。

ガラガラガラ

みんな訳がわかんないって顔で教室の真ん中に大きな空間を作った。

「さあまんやかに集まってくれるかな。」

みんなが集まったところでプロット先生は教壇の上の机に置いたプロセクターのスイッチを入れた。

何故だか知らないけれど、勝手に僕たちのまわりが薄暗くなって壁に大きな白い画面が浮かび上がった。

「先生、なーんも映っていません。」

僕の口め、しゃべるなって。

「あつ、ちよつと待ってね。パソコンのスイッチが入ってなかったんだ。あれっ、パソコンは？」

プロット先生は机の横へ行ってつぶやいた。

「まだ出してなかったんだ。」

そう言いながらバックパックからノートパソコンを取り出して机に置いた。見るとパソコンからコードが伸びてプロセクターに勝手につながってしまった。

電源コードも勝手に伸びている。

いいなあ。あんなパソコン欲しいなあ。

「さあお待ちませ。」

先生の言葉で僕達全員はうしろを振り向いた。

画面には大きなディプロードーカスが映っていた。

「さあ、この恐竜は何と言う名前かな。」

「イツツ、ディプロードーカス。」

プロット先生が聞いたと同時に僕の口が叫んだ。

「えー隆史が英語しゃべったー。」

「ビックリしたなあ。」

「どうしたのー。」

みんながビックリして僕を見つめている。

でも実は、自分でもビックリしているんだ。

「やっぱり恐竜博士だ。」

「そうディプロドクターだね。タカシえらいぞ。さて、今日はこの恐竜も含めて彼らのしっぽの勉強をしよう。」

「えーしっぽ。」

ひろこが汚らしい感じで叫んだ。

「そう、しっぽ。でもね、人間以外の動物はみんなしっぽを持って
いるね。あれって何か働いていると思うかい。どう、ひろこ、お猿
さんのしっぽって必要なものかな。」

よそ見をしていたひろこに先生が声をかけたので、彼女はドギマギ
している。

「えっ、そっ、そう、あっ、そうだ、お猿さんが木から木へ移ると
き、枝にしっぽを巻きつけたりしていますから、手のように必要だ
とおもいます。」

「うんそうだね、いいところを見ているね。じゃ恐竜のしっぽはど
う言う働きをするのかな。キヨタカ。」

「はい、走ったり歩いたりする時にバランスをとる為だと、何かの
本に書いていました。」

清高が自慢そうにメガネを人差し指で少し持ち上げながら言った。

「そう、いい事を知っていたね。えらいぞ。さあそれ以外にも知っ
ている人はいるかな、じゃ例えば、タカシのしっぽみたいなのはど
う言う働きをするのかな。」

プロット先生が言ったが、僕達は「へー」と言った。

先生は何を言っているんだろう。僕にはしっぽなんかありやしない。

でも、みんなはなぜ僕を見て笑うんだ。指まで指すな

「えーなんで」

僕はうしろを見てビクリした。僕のおしりからはディプロドールカス のしっぽみたいなが生えていた。

みんなは僕から離れて笑っているだけだ。

こんなのイヤダ。取ってやろうと先っぽを捕まえようとするのだが体が廻るとしっぽも一緒になって回るから捕まえられない。もうちよつとの所で手が届かない。

「わたしんちの猫のようだ！」

清子が大きな声で叫んだ。

僕は廻りつづけた。しっぽは同じように回るけど、たまに床をムチのように打つ。

その音でみんなは笑うのをやめた。

恐ろしくなつたんだ。

でもまた笑い始めた。
なぜ？

だって僕のしっぽがひとみのお弁当を教室の隅まで跳ね飛ばして、それを慌ててひとみが取りに行ったからなんだ。

ひとみは怒っているけれど

僕に怒つても仕方が無いじゃないか、しっぽに言っとくれ。

見たらひとみのおしりにもしっぽが生えて来ている。

僕は思いつきり笑ってやった。

「重いわよ。誰か助けてー」

ひとみは床に座り込んでしまった。

でも誰も動かない。だってみんなのおしりにもしっぽが生えて大きく、大きくなっているんだった。

「さあみんな。自分のしっぽを見て何と言う名前か恐竜のしっぽか
言っただらん。」

プロット先生はイスを引き寄せて、そして座りながら言った。

「僕のはアンキロサウルスだと思えます。」

またまた清高め。僕が先に言おうとしたのに。

「わたしのはハンマーみたいなのが先っぽについているからヨーブ
ロケエフェラスでしょう。」

「僕のはツノが生えているよ。なんだろう。」

和也が言ったので、

「馬鹿だなあ、決まっているだろうステゴサウルスだよ。」

和也に言っただった。

ふふふ、どうだ清高。僕は恐竜博士なんだぞ。

僕、毛利隆史はふんぞり返って言った。

「あつ、プロット先生。しっぽは体を支える役目もします。今、隆
史がやってるみたいに。」

機嫌を直したひとみがプロット先生に言った。

「おつ、ひとみ。いい所を見つけたね。さあ、みんな。しっぽはど
んな働きをするのかな。」

プロット先生が立ち上がった聞いた。

「はい、全部武器だと思いまーす。」

清子が自分のしっぽを重そうに持ち上げながら言った。

「そう、そうだね。しっぽの先がムチのようになってるのは本当
にムチのように使うし、ハンマーみたいなのが付いているのは、そ
れで相手を叩くしね。そうだね正解。武器になったりバランスをと
ったり、カンガルーみたいに3本目の足みたいに使って体を立て足
り出来たよね。さあ、みんなのしっぽはだいたい大人の恐竜のしっ

ぼぐらいになつた筈だから長さも覚えておいてね。」

「はい僕のはディプロドーカーだから10mぐらいあります。」
「僕らの口め。うるさい。」

「はいはい、じゃそのままですクリーンを見てくれるかな。」
プロット先生はそう言ってスイッチを押した。

スクリーンにはステゴサウルスの子供が楽しそうに遊んでいる。

「うわーかわいい。」
ひとみがかわいい声で言った。

「さっき怒つた時の声と全然違つじやないか。」
まっ、いいか。

「あつ、ティラノサウルスが来たよ。」

「赤ちゃんステゴサウルスが走り出した。」

「あ、大人の方へ行っているんだね。」

「大人ステゴサウルスが気がついたみたいよ。」

「間に合うかなあ。」

「早く、早く、早く走りなさいよ。」

「大人ステゴサウルスが走り出したわよ。」

「じゃ助かるね。」

「見ている内にティラノサウルスが近かついて来た、

「あつ、あぶない」

「みんなが叫んだその時、

大人ステゴサウルスがティラノサウルスに体当たりをした。

「今にも食いつこうとして頭を下げていたティラノサウルスは少しバ
ランスを崩して横へ跳ね飛ばされた。」

「その間に赤ちゃんステゴサウルスは大人達のうしろへと逃げ込んだ。」

「あーよかった。助かつたんだ。」

「誰かが言つた時、

5、6頭の大人ステゴサウルス達がティラノサウルスにおしりを向けて横一列に並んだ。
それぞれがしっぽを振ってティラノサウルスが来たら叩くぞーと脅しをかけている。

ティラノサウルスは、どうしようかなと迷っていたが、プイッと回れ右をして帰って行った。

「めでたし、めでたし。」

プロット先生が言ったとたんに僕はうしろにひっくり返ってしまった。

今までしっぽを床に立てて楽チン姿勢で見ていたのに、急に先生ったら取り上げちゃうんだから。

「おーイデー」

第4話 終わり。

第5話 ステゴサウルス

第5話 ステゴサウルス

ガラ。ゴン！

いつものようにプロット先生が教室に入ってきた。

もう長く住んでいるんだから入り口の高さぐらい覚えてもいいと思っただけど・・・

僕、岡の上小学校6年A組の毛利隆史は思った。

「おーいてー！ おはよう。」

プロット先生は頭を押さえながらあいさつをした。

「起立！」

横の席の清子が大きな声で言った。彼女はクラス委員長なんだ。

かわいいけれど怒ったときは怖いんだ。

「プロット先生おはようございませう。」

全員が立ち上がって朝のごあいさつ。

「はい、おはよう。」

今日は思いつきり打ったようでプロット先生はまだ頭を押さええている。

「先生、背が高いんだから、腰を落として入ってこなくっちゃ。」

僕が大声で言った。いや僕じゃない。

僕の口って勝手にしゃべっちゃうんだ。でもたまには僕自身が知らない事までしゃべるから今じゃクラスで恐竜博士ってあだ名がついたぐらいなんだ。

「そうタカシ。君の言うとおりだ。明日からはもっと気をつけよう。」

「

「さあ勉強をはじめよう。教科書の23ページをあけて。」

プロット先生が例の黒いバツクパツクの中へ手を突っ込んでゴソゴソかき回しながら言った。

でも僕たちは全員がポカーンとしている。

プロット先生が気付いて聞いた。

「あれっ、みんなどうしたの。」

「だって私たち、教科書なんて持っていません。」

大内清子が言った。

「えっ、どうして。」

「だって先生は急に来て、それから教科書なんて使って、今まで勉強しなかったじゃない。」

すぐうしろの席で菊池ひとみが大声をだした。

お陰で僕の耳はキンキン。

「えっ、これって勉強を始める前に先生が言うあいさつじゃないの。だって、昨日、ほかの先生の授業を見なさいって教頭先生が言うから見てきたんだ。そうしたら全部の先生が同じように言ってたから。」

プロット先生が目を丸くして言うものだから僕は算数の教科書を出して、

「これが教科書。」

って言った。

「おータカシ、ありがとうね。なんだ本の事が。じゃ、いらねえね。」

「どうして、本を読めってみんな言うわよ。TVのドラマで道明寺だって本を読み、本をとって言うわよ。」

うしろの方の席のヨシミが叫んだ。ちよつと小柄で色の白いヨシミは本大好き人間だ。毎日学校での休み時間には決まって本を読んでいるんだ。

そうそうヨシミって『好』って書いてヨシミって読むんだって。

「ごめん、ごめん、ヨシミ。そうじゃないんだ。僕の授業には本は要らないねって言ったんだ。じゃ先週出てきたステゴサウルスを今日は勉強しよう。さあ、この恐竜について知っている事があつたら何でも言つてごらん。」

プロット先生は言つてバックパックの中から白いチョークを取り出した。それをブイッと空中へ放り投げるとチョークは方向を変えて黒板へと飛んで行き、大きなステゴサウルスの絵を描き始めた。「ワーオー」

僕は心の中で叫んだ。

「じゃタカシ、君からだ。ステゴサウルスって名前の意味は知っているかい。」

「えっ、ステゴサウルス。そりやもう、えーっと。子供が生まれたら親達はスタコラサツサとどこかへ行っちゃう恐竜だからかな。」
急に名指しされたものだから、僕はどドギマギして適当に思った事を口にした。

「そんなの可哀想じゃないの。」

清子が横で目をむいて僕に怒る。

「ははは、そうか捨て子ねえ。なるほど。だれかほかに知っている人はいるかい。」

シーン。

先生が言つたつてそんなの知っているやつはいないよ。

「じゃ、説明しよう。『Stego』って言うのは『屋根』という意味なんだよ。最初に80cmの長さの背中にある骨の板みたいなのが発見されてね、それが屋根に貼るタイルみたいな形だったからこう言う名前がつけられたんだよ。わかったね。」

「はい」

僕たちは揃つて返事をした。

プロット先生が黒板にくっついていて、チョークを手にとって黒板をコンコンと叩いた。

「さあ実物で勉強しよう。」

黒板に書かれたステゴサウルスがだんだんと太って来た。すごいや3Dになった。

今まで灰色の黒味があった、いや緑色の濃いのかな、になってきた。

形が出来た頃にポンと黒板から飛び出してプロット先生の机の上に立った。

「プロット先生。ステゴサウルスってこんなに小さいのですか。」

また僕の口だ。勝手にしゃべるなってーの。

「ああ大人だと8mから9mぐらいになるんだけど、今日は5分の1のミニチュアにしたんだ。だって大きいと危ないじゃない。でも気をつけてね。近づくとしっぽで叩かれるよ。」

「でもこんなサイズならペットにしたらかわいいわね。」

清子が僕にかわいい声でささやいた。

「さて、このステゴサウルスは、いつの時代に生きていたのかな。」

「はい先生。図書館で見た本には1億5000万年前のジュラ紀と書いていました。」

清高が手を挙げたと同時にしゃべっちゃまった。うー腹立つー。

僕だって知ってらー！。

「おっ、そうか清高も勉強してきたんだね。えらいぞ。じゃ次。体重はどのくらいかな。」

「はい、2トンです。」

今度はやったぜ。僕の口が早かった。

「そう。タカシはやっぱりよく知ってるな。じゃこのステゴサウルスが食べる物は何だろう。」

「そんなの簡単だよ。勿論、草なんかです。」

「植物です。」

「葉っぱだよ。」

みんなが口々に言った。

「そうかそうか、みんな良く勉強してきたね。えらいえらい。植物イーターの事を何と言ったかなあ。覚えているかい、最初の頃に勉強したね。」

「ハービボーだよ。」

みんなが思い出そうとちょっとだけ間が空いたところへ僕が言った。

今度は僕の口が勝手にしゃべったんじゃない。

えっへん。

「そうハービボーだね。肉食はカーニボーだったね。」

「はい」

「よしよし、じゃもう一つ。これは温血動物、それとも冷血動物。

さてどっち。」

シーン。

「あれっ、どうして。」

プロット先生あ不思議そうな顔でみんなを見回した。

「だってそんな事ならってないもん。」

和也がうしろの方から叫んだ。

「えっ、そうだったかな。じゃあねついでに勉強しておこう。温血動物つてのは食べ物を食べて、それをエネルギーにして体温を保つ動物の事なんだよ。カズヤ。君がご飯を食べたら体が熱くなるだろう。」

「はい。」

「そうだろう。じゃそうしたら人間はどっちかな。」

「温血動物です。」

みんなが揃って言った。

「はいよく出来ました。じゃ次は冷血動物の事だよ。これはね太陽の熱を直接貰ったり、土地や周りにあるものから熱を貰って体温を保つ動物達の事なんだ。誰だっけ家で犬を飼っているのは。」

「はい。」

「はい。」

先生の言葉でクラスの半数が手を挙げた。

「そうか、ひとみんちの犬はいつもどこかの土の上で丸くなって寝ているだろう。そうやって土の温かさや太陽の熱を貰っているんだよ。それが冷血動物。わかった。」

「はい。」

「じゃ、このステゴサウルスはどっちかな。」

「冷血動物です。」

「はいよくできました。じゃ、今日の勉強はおしまいにしよう。タカシ、レポートにまとめておいてね。新聞に書くんだろう。」

と言ってプロット先生は時計を見た。

「あれっ、変だなあ10分も時間が余っちゃった。じゃ何か質問はあるかな。」

誰も手を挙げないので、仕方が無い僕がしゃべるか。

「先生、このステゴサウルスって、こんな色なんですか。なんか軍隊の色みたいじゃないですか。」

「どんな声で啼くんですか。」

横から清子が聞いた。

「よしよし、じゃ色の方から考えてみよう。恐竜ってのは2億4000万年前から生きて、6500万年前にいなくなっているよね。」

人間の歴史は精タン万年だろう。誰も見た人はいない訳。恐竜が見つかるのは化石になった骨とか難しい外皮みたいなものだから、色なんて判らないんだよ。このステゴサウルスだって、この板のような背中のトゲも敵から身を守る為でもあるし、体温を保つ為でもあった訳だから、色も黒なら太陽熱を吸収しやすくなるし、鏡みたいだ

と光を反射して敵の目を晦ますことだつて出来るしね。」

と言いながらプロット先生がステゴサウルスの背中を触るとトゲが貝を貼り付けたように変わった。そして先生が背伸びをして手のひらをステゴサウルスに向けると、すごい光が先生の手のひらから出た。

その光がステゴサウルスのトゲに反射して僕達は一瞬何も見え無くなった。

「どう。こんな事も考えられるだろう。だから色は今生きている動物たちを参考にして誰かが考えたものなんだよ。清子が言ってた声も実は一緒なんだ。でも声は化石に残った骨なんかから少しは想像することが出来るんだよ。じゃ、今日は終わりにしよう。」

そう言いながらプロット先生はバックパックにステゴサウルスを押し込み始めた。それは風船のようにしぼみながら入ってしまった。

恐竜新聞 ステゴサウルスメモ 毛利隆史

ステゴサウルスの化石は主に北アメリカで発見されている。

150 mya に生きていた。

大きさは8mから9m。

名前の意味は屋根恐竜。

背中の特ゲは二列になって生えている。

しっぽには4本のつのが生えて、敵が来たらこれで叩く。

冷血動物。

背中の特ゲの色は黒かも知れないし、鏡のような色かも知れない。

でも、小さいとかわいかった。

第5話 ステゴサウルス了

後記

今回はバックパックの活躍があんまり無かったね。次回はもっとバックパックに働いてもらうからね。
そうそう今回からお友達が増えたんだ。名前は武田^{よしみ}好ちゃんだよ。仲良くしてね。

第6話 恐竜たちの絶滅（前書き）

今回の話は、恐竜絶滅に関して地軸の傾斜を視点として考えてみました。お楽しみください。

第6話 恐竜たちの絶滅

D rプロットの恐竜教室

登場人物

D rプロット（ロバート・プロット）

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをかけている。

鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。

やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学

舞台

岡の上小学校 6年A組

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

平賀和也

武田好

第6話 恐竜たちの絶滅

毎週、岡の上小学校6年A組の1時限目は、僕、毛利隆史の大好きなプロット先生の理科だ。

だから最近日は曜日には決まって図書館へ行って予習をするようになった。

でもあの先生は次の時間は何を言うって言うてくれないから、予習するにしてもターゲットが決まらないんだ

たまにクラスの仲間たちとも図書館で会うようになった。まけるもんか。

今朝は家を飛び出して一番に教室へと入った。だってこんなに勉強が楽しいなんて知らなかったもん。

ガタツ!!

「イテツ」

「アウツチ！」

教壇を走り抜けて自分の席へ行こうとしたら、先生の机の下から又ーツと出た足につまずいた。

「どうして先生、こんなところに寝ているんだよ。」

「オータカシか。痛かったよ。」

「あつ、ごめんなさい。」

先生が蹴っ飛ばされた足をさすりながら起き上がって言った。

「でも先生。どうしてこんなところに寝ているんですか。」

「ああ昨日はオーストラリアの友達に呼ばれてね。恐竜掘りを手伝

っていたんだよ。今朝早く帰って来たから家へ帰るのが面倒くさくてね。ははは、」

プロット先生が頭をかきながら言った。

「へーすごいね。どんな恐竜を掘っていたの」
興味深々で僕が聞いた。

「あああとで勉強の時に言おうと思っていたんだけど。すごいんだよ。長さ33mもある首の長いティタノサウルスなんだよ。日本では雷竜って言うんだよ。そうそう、ヒューイみたいな恐竜だよ。」
プロット先生が顔を赤らめながら力を込めて言った。

気が付いたら周りにはみんなが来て僕と同じように先生の話を楽しんでいる。

「先生。その恐竜の話はあとにして、このハンカチを貸してあげるから顔を洗って来なさいよ。埃っぽくって汚いわよ。」

清子がかわいいハンカチを出して先生に言った。

「オーありがとう。キヨコ。そんなに汚いかい。」

「そうだよ、汚い。」

「くさいわよ。」

「キツタネー」

先生が言ったと同時にみんなが声を揃えて言った。

「判ったわかった。じゃ話は顔を洗ってきてからにしよう。すぐ帰ってくるからちよつと自習していてね。」

「はい、ごゆっくり。」

和也がニコニコと先生を送り出したあと、

「おい隆史。この間に先生のバックバックの中身を見てみよう。」
と僕に向かって言った。

「それは良くないと思うよ。」

でも僕が言った時には既に和也の手はバックバックの中に入っていた。

「なーんだつまんないの。なんにも入ってないや。チエつまんない

の。」

ガサゴソ手で探していた和也がガツカリして言った。

クラス全員が揃って席に戻ったときに先生が帰ってきた。

「オツと危ない。」

今日はうまく腰を落として頭を打たないで入ってきた。

「さあ今日は何から勉強をはじめようかな。」

先生は言ってカラツポのバックパックを机の上に置いた。

「さっきの話の続きをするって約束じゃんか。」

僕の口が叫んだ。

「そうか、そうか。タカシそう言うなって。わかってるよ。どこまで話したかな。そうそうテイタノサウルスだったね。」

「それよりもオーストラリアのどこで掘ってたの。」
清子が聞いた。

「オーキヨコ。いい事を聞いてくれたね。あっそうそうハンカチありがとうね。」

先生はそう言っただバックパックの中から清子のハンカチを取り出した。それは綺麗に洗ってアイロンまでかかっているように元より綺麗なハンカチだった。

「デモね、あんまりその町の名前は言いたくないんだよ。クイーンズランド州なんだがね。」

先生がなんとなく言いくそうにしているので、

「どうして、何で言いたくないのさ。聞いても僕たちは行く事も出来やしないからさ。」

また僕の口が勝手にしゃべるんだ。

「そうだなあ、町の名前だからいいか。エロマンガと言う町なんだよ。」

「えーうっそー」

「変な名前」

「それって先生が勝手につけた名前でしょ。」

「やだー」

みんなが一斉に声を出した。

「ははは、まあまあ、みんな静かに。静かにしなさい。説明するから静かに。」

先生が大きく手を広げて言った。

「だから言いたくなかったんだよ。でもね、この町は150年以上も歴史のある町だから、その時の日本は江戸時代だろう。そんな時に日本語ではこんな言葉は無かっただろう。判った？だから日本語の方があとから出来たんだから笑っちゃだめだよ。これはねオーストラリアのアボリジニー語で風の強い暑い台地という意味なんだよ。」

「へーそうなんだ。」

僕はつぶやいてうなずいた。

「はい、先生。」

おいこら、僕の手と口！なんでだ！手を挙げて先生を呼ぶんだよ。勝手な事をするな。

「オータカシ。なんだね。」

「はい、えっ、あっそうだ、そのティタノサウルスはどうして死んだのですか。」

僕の口め。先生を呼んでおいてあとは知らんぷりするんだから。仕方が無いから僕が言ったじゃないか。

「おうタカシ。それは難しい質問だね。人間だって病気で死ぬ人もあるし、ニュースでも聞くように殺されたり、交通事故つてもあるよね。まあ恐竜の場合は交通事故つてのは無いだろうけれど病气や殺されたりはあるからねえ。このティタノサウルスはどうして死んだらうね。でもねえ長い恐竜達の歴史の中で色々な恐竜達の種族が全滅していることもたくさんあるし、全ての恐竜達が6500万年前に絶滅したのは知っているよね。」

「はい」

「そう、これをK-T境界って言うんだけど、この境目に哺乳動物を残して、恐竜達は全部死んじゃったんだ。さてどうしてかな？先生がみんなを見回して言った。」

「何かの本で大きな隕石が落ちてきて死んだって読みました。」
「インテリの清高が自慢そうに言った。」

「おーキヨタカ。よく知っているね。そうユカタン半島の隕石説は有名だね。地質学者が言うのには隕石が落ちた穴は16kmもの深さになって、直系169km以上の穴だったそうだよ。だからそのシヨックで300mもの高さの津波が起こったりして周辺3000km以内の動植物は全部死んじゃったんだ。さて他には無いかな。」

「はい先生。僕は地球の陸地が動いたからだと思います。」
「ふふふ、どうだ清高め。」

「おつ、タカシ。良いところに目をつけたな。そう大陸の移動は2話目で勉強したね。大陸が移動して気候が変わり食料の植物が無くなってハービボーは死んだら、それを食べていたカーニボーも生きていけなくなるって勉強したね。」

「はい」

「まだまだあるよ。大陸が移動する時に、色々な所で火山の爆発なんかがある筈だね。そしてその吹き上がった噴煙が地表を覆ってしまつて灰の中に埋もれて死んだつて事も有る筈だよ。大雨で流されて死んだのも有るだろうしね。」

「でも先生、プテラノドンなんか空を飛んでいたのでしょうか。飛んで逃げれば助かったのもいるのじゃないですか。」

島津直子が小さな声で聞いた。

「そうだねナオコ。そりゃあ空を飛んでいるんだから綺麗な空の方へ逃げたら助かるだろうねえ。でも彼らも全部いなくなつたんだよ。どうしてかねえ。」

みんなも静かに考えはじめた。

「そうだ！隕石にみんな打ち落とされたんだ。」

僕が叫んだ。

「ははは、それもいいな。インベーダーゲームみたいにドンドンと打ち落とされていく。でも隕石だけじゃなくて、火山の噴火で飛んだ焼けた石なんかも打ち落とす弾になったのかも知れないねえ。」

「そうだそうだ。バギューン、バギューン、ドンドンドン。」
僕が身振り手振りでふざけた。

「昨日もオーストラリアの大先生と話していたのだけれど、地球に電気が働いているのを知っているかい。」

「知ってますよ。磁力線の事でしょう。南極から北極に向かって流れている電気。」

先生が言ったと同時に清高が言った。

清高め！またでしゃばりやがって。

でも、知らなかったなあ。

そんな電気があるんならタダでお湯だって沸かせるじゃんか。

「そうキヨタカ。よく知っていたねえ。磁力線の話だよ。その前にチヨット待つてね。」

プロット先生は言つて、バックパックの中から前に取り出した風船の地球を出した。

「さあ、この地球は今の地球だよ。でも少し変じゃないかい。さあどこが変なのかわかるかな。タカシどうだ。」

「えっ、なんで僕。でも、あつ、地球つて少し傾いています。でもこれは傾いて無くて北極は真上、南極は真下になっています。」

急に名指しされたのでドギマギしながらだっただけど答えたぞ。どうだエツヘン。

「そう、よく出来ました。ちょっと待つてね。」

先生はそう言つと手を北極にあてた。

同時に教室が薄暗くなつて地球の周りが輝きだした。

南極から北極に向かって電気が流れているのが見える。

宙に浮いた地球が回転を始めた。そうして少しずつ傾き始めた。しばらくして回転がとまった。

「どうこれでいいかな。タカシ。」

「はいこれで今の地球になりました。」

僕が勇んで返事をした。

「そうだね。さっきの地球は、実はね6000年前の地球だったんだよ。」

プロット先生が傾いた地球の北極点に手を乗せて言った。

「えーそうしたら先生。このままずーっと傾いて行って横向きになることもあるんですか。」

ひとみが目を丸くして聞いた。

「そうだよ。そうして北と南がさかさまになるんだよ。」

先生が言ったとたんに地球はさっきより早く回転して徐々にもっと傾きだして横向きになった。

「えーこれじゃ、南極と北極は今の赤道じゃないですか。」

僕が叫んだ。

「そうだよ。その証拠に南極でも恐竜の骨が見つかっているんだよ。」

「じゃ、先生。このときは今の赤道は毎日、南極 赤道 北極 赤道 南極って繰り返しているんですか。」

「タカシ、いいところに気が付いたね。どう君は生きていられるかねえ。」

「そんなー無理ですよ。」

僕だけじゃなくてみんなが揃って言った。

「そうだろう。それがK-T境界に起こったんじゃないだろうかと大先生は言ってるんだ。」

「そんなあ、それってその大先生の想像だけでしょ。」

「ははは、そう言えばそうだけど、チョット見ててね。」

先生が地球の上に手をかざすともっと早く回り始めた。どんどんと北極と南極が反対になっていく。止まったときは地球が逆立ちして

いた。

「さあちよつと暗くするよ。」

電気の線が見え始めた。それは下から上に向かって流れている。と言うことは北極から南極へ流れているんだ。

「さあ、この証拠があるんだよ。この地球を掘っていくと色んな地層に分かれているのを知っているだろう。その地層に刻み込まれた電気の方向が交互に反対方向を向いているんだ。どうだい。」

プロット先生がお得意の手を組んで髭をしごきながら言った。そのときバツクパツクの中からチヨークが飛んで出て黒板に地層と電気の方向を書いた。

「さあみんなはどう思うかな。」

先生が言ったと同時に終業のチャイムが鳴った。

「じゃ、少し自分でも勉強しておいてね。もし君たちが地質学や古生物学を勉強するようになった時には役立つと思うからね。」

プロット先生は言いながら例のように地球に針を突き刺した。チヨークと風船地球は教室中飛び回ってバツクパツクへと吸い込まれていった。

第6話 恐竜たちの絶滅 終了 2007年6月28日

後記

さあ今回はどうだったかな。地球が傾いていくのは怖いよね。でも心配はいりません。

だって君たちは今から1万年も2万年も生きてはいないからです。ひよつとしたらプロット先生だけは生きているかな。

第7話 恐竜を探しに行こう。

Drプロットの恐竜教室

Drプロット（ロバート・プロット）

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをかけている。

鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。

やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学・古生物学

舞台

岡の上小学校 6年A組

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

平賀和也

武田好

第7話 恐竜を探しに行こう。

「どうしたの、天気がいいのに長靴なんかはいて」
朝、家を出る前にお母さんが怪訝そうに言った。

「先生がはいて来いって言ったんだ。」

僕、岡の上小学校6年A組の毛利隆史は手を振って

「じゃ、行つてきまーす。」

と学校へ急いだ。

「おつ、みんな用意はいいね」

プロット先生がみんなの服装を見て言った。

「でも先生、どうして天気がいいのに長靴なの？はずかしかったわ
よ。」

大内清子が口をとがらせて言った。

「まあキヨコ。そう言うな。今日はみんなが行きたいって言ってた
化石を掘りに行くんだから。」

「えー」

「どこへ？」

「やったー」

プロット先生の言葉と同時にみんなが叫んだ。

「ところでプロット先生。僕たちはどこで化石を掘るんですか？」

「おや、今日の僕の口はすごく真面目だ。」

「まあそれは行ってからの楽しみ。じゃ、みんな弁当だけを残してカバンの中身を全部机の中に入れて教室のうしろの出入り口に集まってね。」

先生が言ったとおりに僕たちはお弁当だけを残して全部机の中に入れた。

「あーいけないんだ。先生、隆史はゲームを学校へ持って来ています。」

「え、こ、こら清子。駄目だよ。言うなよ。」

僕はドギマギして先生の方を見た。

「タカシ、学校は何をするところかなあ？」

プロット先生がウインクをしながら聞いたので僕は少しホツとしながら

「はい、勉強をするところです。」

と頭をかきながら答えた。

「そう、そうだよな。じゃそのゲームを預かっておこうかな。」

先生が大きな手を出したので僕は仕方なく渡した。

ちえ、ちくしょう清子め。

清子をにらみつけたが、彼女はプイツと横を向いて知らん顔だ。

「じゃ出かけよう。ドアを出たらそこでみんなが揃うまで待ってね。それじゃ順番にこれを持って一人ずつ出て行ってくれるかな。」
ドアの前に立ったプロット先生は、そう言って一人一人につまよ
うじのような物を手渡した。

「みんなそれをカバンの中に入れておくんだよ。」

「はい」

何だか判らないけれど、僕たちは返事をして言われたとおりカバンの中へ放り込んだ。

教室の外側ローカで全員が揃ったので

「じゃ先生に付いて来なさい。絶対に離れないでね。」

「はい」

プロット先生について僕たちはゾロゾロと移動をはじめた。

「なーんだ何も無いじゃないか、つまんないの。」

ドアを出た処で、化石を探す所へ行くのかと思っていた僕は、横に居た清高に耳打ちした。

「しっ。」

清高が口到人差し指を立てて

「でもね、おかしいよ。どこの教室にも誰もいないみたいに静かじやん。」

と言った。

そう言われて見回すとなるほど静かだなあ。

先生がローカのかどを曲がった。

そこから先は赤土の牧場みたいなところだった。

「えっ、なんで？」

僕は振り返って見た。でもそこには学校の代わりにキャラバンカーが一台あるだけだった。

「なんでだよあ、誰も先生に聞かないのかよ。」

「先生、ここはどこですか？」

僕が大声で聞いた。

「おつタカシか。今、君が歩いているところは1億年ぐらい前の土地だよ。」

先生は振り返らないで答えた。

「ち、違います。ここはどこなんですか？」

僕がもう一度聞いた。こら、みんな何とか言え。

「タカシ、心配しないで歩きなさい。もうすぐだから。」

またプロット先生はうしろを振り向かないで言った。

でも回りは赤土だけで何も無いし、所々に30cmぐらいの高さの草がまとまって生えているだけだし。横もうしろもどこを見ても地平線が見える。

空の青さと赤土の色が交わった地平線はすつごくきれいだ。

あつ、き、きれいだななんて考えているどころじゃない。

10分程歩いた所でプロット先生が振り向いた。

「さあみんな止まって。ここだよ。」

「こつ、ここだよって、なーんも無いじゃん。」

僕は心の中で叫んだ。

パン！

プロット先生が両手を思いっきり叩いた。

「えーわたし達どこにいるの？」

「ここどこー」

「広いなあ。」

急にみんなが口々に騒ぎ出した。

なーんだみんなは眠りながらついて来ていたのか。

「あつ、あれ何だ。ゲツ、カンガルーだよ。」

和也が叫んだので、僕たちは和也の視線をトレースして見た。なるほど10頭程のカンガルー達が僕たちを眺めている。

「かわいいー」

「先生、近づいてもいいですか？」

誰かが言った。

「駄目駄目。ナチュラルの動物は危ないから近寄っちゃ駄目だよ。」

それよりかみんなのカバンの中からハンマーを出してくれるかい。」
先生も普通に戻って言ったけど僕達は

ポカーン

としていた。

「ハンマーなんか持って来てません。だって先生、そんな事言わなかつたじゃないか。」

僕の口が勝手に言った。

「わかった、わかった。でも試しにカバンを開けてごらん。きつと入っていると思うよ。」

プロット先生が言うので僕は自分のカバンの中へ手をつ突っ込んだ。あれっ、弁当以外に何かが入っている。これか！ホッシキングハンマーだ。

でもいつ入れたのかなあ。

「ハイ、プロット先生いらっしやい。」

どこから出てきたのか、外人のきれいな女の人が僕たちの後ろから声をかけた。

背が高くつてサファリルックの制服みたいな格好をして、まん丸のトンボサングラスをかけている。

「おーキャシー。遅くなつてごめんごめん、この子達が僕のクラスの生徒たちだよ。」

プロット先生がキャシーに言い、僕たちに向かつて

「この人はキャシー。ここで恐竜を掘っている古生物学者なんだ。さあみんなご挨拶。」

「キャシー先生、こんにちは。」

僕たちは口を揃えて言った。

「はい、こんにちは。みんな元気がいいわね。じゃ、今日はわたしがみんなを案内するわね。」

キャシー先生はそう言つて僕たちを大きな穴の方へと案内した。

その穴の深さは1mほどで、穴と言う程では無かったけれど広さがすごい。中でテニスが出来る。いや、野球が出来るくらい広かった。

「さあ入って。ここは5年くらい前にバールサウルスが見つかった所なのよ。体長26mのが見つかって、その次に21mぐらいのが見つかったのよ。今日はみんなで3番目の恐竜を探しましょうね。」

キャシー先生が言った。

「やったー、みつけるぞ。」

また、僕の口だ。勝手な奴なんだ。

「そう、タカシクン。頑張って見つけてね。」

「はい」

えっ？でも？どうしてキャシー先生は僕の名前を知っているのかな。

「みんな、ここに集まって頂戴。さあ、これを見て。どう、これが骨の化石よ。」

キャシー先生の周りに集まった僕たちに先生は足元に半分ぐらい出ている骨を指さしながら言った。

「どう、化石つてのはこんな色。わかった？ちょっと触ってみてもいいわよ。」

先生が言ったので僕が一番に腰をかがめて触った。

「へーざらざらじゃん。」

「わたしも、わたしも」

「隆史は邪魔よ。早くどきなさい。」

清子はうるさいなあ。

「でもね、この骨はカバーをしたりして保存してないから太陽光線や雨で痛んでいるのでねえ。もう少しツルツルした感じなのよ。じやみんな。それぞれ好きな所へ行っって化石を探して頂戴。もし何か見つけたらプロット先生かわたしを呼んでね。じゃ、宝さがし始め」

キャシー先生が言って手を叩いた。

「よし、僕もつと大きなテイタノサウルスだ。」

「僕は恐竜のたまご。」

僕たちはそれぞれが言いながら広い穴の中でちらばった。

勿論僕もみんなが居る反対の方へと走って行った。

ゴツン！バタツ！

もうう、かつこ悪い。つまりいてころんだじゃないか。

誰も見てなかっただろうなあ。

僕は頭を回してみんなを見た。でもだれも僕なんかを見てなくて、一生懸命地面を見ながら歩いている。

近眼でめがねをかけている清高なんか、ずり落ちそうなめがねを押さえながら芋虫みたいに土地の上を這っている。

よかった。かつこ悪いとこなんか見せたくはないからなあ。

「でも、なんでこんな所に出っ張りがあるんだ。危ないなあ。チヨツトかたづけとくかなあ。」

僕は持っているホツシキングハンマーの平たい方で周りの土をほじくった。

「あれ、この石、根っこがあるぞ。斜めに入っているのかな。反対側を」

コンコン、サクサク。

土を取り除く度に下の方が大きくなる。

「えっ、これって化石なのかなあ。」

コンコン、サクサク。

「変な形の岩だなあ。先生に聞いてみようつと。」

僕は目印にハンマーを石の上に乗せてプロット先生のところへと走った。

「先生、へんな形の石なんです。ちょっと見に来てください。」

「ほー早速タカシが化石を見つけたのかな。」
プロット先生が大きな声で言ったので近くのみんなが顔を上げた。先生、そんな大きな声で言ったら恥ずかしいじゃないか。清子なんかにらんでいたぞ。

「ところで先生、ここどこ？さっき聞いたけど言ってくれなかったじゃない。」

プロット先生と一緒に歩きながら僕が聞いた。

「えっ、言っでなかつたっけ。タカシが聞いていなかったただけだろう。オーストラリアだよ。ウイントンって言う町。わかった？」

「でも聞かなかつたよ。」

先生が言うので口を尖らせて言い返した。

「じゃ、誰かに聞いてごらん。」

「和也、今どこにいるのか知ってるかい。」

ちょうど横に居た和也に聞いた。

「何言っでんだい。オーストラリアのウイントンって町だよ。お前、頭わるいなあ。」

和也が馬鹿にしたように言っで向こうへ歩いて行った。

頭に来るなあ。でもみんなはいつ聞いたのだろう。

「おっ、これか。タカシ。えらいぞ。こうやって目印をしておくで見逃す事はないからね。キャシー先生のところへ行っでカメラを借りてきなさい。」

プロット先生が言っでたので僕は走った。

「キャシー先生。カメラ、カメラ。」

僕はフウフウ、ハアハアと息を切らしながら言った。

「どうしたのよ。カメラ？あつ化石を見つけたのね。」

どうして先生たちは大きな声で話すんだろう。またみんなが振り返っでたじゃないか。

「はい、じゃこれを持って行っで。プロット先生は一緒にいるのね。」

「はい一緒です。」

キャシー先生から手渡されたカメラを握りしめて僕はまた走った。
「はい先生、これ、ハーハーゼーゼー」

カメラをプロット先生に渡して化石を見るとプロット先生が周りの土をどかせてくれていて、1mぐらいの長さの白い土色をした骨があった。

「えーこれってさっきの石、、、ですか。」

僕は自分の目をうたがった。すごい。

「そうだよ、じゃ写真を撮るよ。記念写真にタカシも一緒に撮ろう。その骨の横に寝てくれるかい。」

「えー先生、骨と一緒に寝るんですか。」

僕はビックリして言った。

「ははは、馬鹿だなあ。君と一緒に写真を撮ったら、骨の大きさがわかるだろう。」

あっそうか、なるほど。

プロット先生が写真を何枚も撮るので少し恥ずかしかった。でも最後に僕は骨に抱きついてしまった。

「ははは、この骨はタカシの彼女だな。」

先生が笑って言った。

「さあドレッシングをはじめよう。タカシ僕のバックパックを持って来てくれるかい。それとキャシー先生も読んできてね、」

「はい」

プロット先生に言われて僕は心ウキウキでまた走った。

でもドレッシング。ドレッシングってなんだろう。サラダの上にかけるのかな。でもここには野菜なんてないしなあ。

プロット先生のバックパックを持ってキャシー先生と一緒に帰って来たらクラスメート全員が集まっていた。

「すごいなあ、隆史。」

「やっぱり恐竜博士だ。」

「どうやって見つけたの？」

みんなが口々に言う。でもつまずいてこけたなんて口が裂けても言えないよなあ。

「ははは、それは簡単だよ。タカシはね走っていてこの骨につまずいてね、ここでこけたんだよ。でも偉いよ。これは何だろうと思つて掘つたのだからね。」

えーなんで、なんでプロット先生が知っているの。そして知つてもそんな大声で言う事無いつしよ。立場ないなあ。

「すつごい、こけたんだ。」

「やっぱり走らないといけないんだ。」

おいおい、待てよ。なんでそんなところで感心するんだよお。

「さあ時間が勿体ないからドレッシングをしよう。キャシー、バケツに水を頼むね。」

プロット先生は言いながらバツクパツクの中から大きな袋を取り出した。

「はい、バケツと新聞紙。ここに置いとくね。」

キャシー先生が、うしろから言った。

えっ、なんで？だってキャシー先生は一步も動いてないじゃん。どこから持つて来たんだよ。

「よしタカシ。まずその新聞紙をバケツの中に入れて、充分に水を吸わせて渡してくれるかい。」

えっ、えっ、えっ、どっ、どうすればいいんだよ。

「先生、僕がやりまーす。」

清高が言った。たっ、助かった。

「じゃ、タカシは別のバケツでこのプラスターを練っておいてくれ。」

へっ、なんじゃそりゃ。でもまあいいか。先生から受け取った袋

の口を開けた時、バケツと水に気がついた。

「キャシー先生、バケツと水。」

と僕が言った時、ふと見ると僕の横には水の入ったバケツがちゃんと置かれていた。

まあいいか。

「先生、どのくらいの固さに練ればいいのですか？」

袋からプラスチックの粉を半分移して混ぜながら僕が聞いた。

「タカシはお好み焼きを作った事はあるかい？」

「はい、あります。」

「じゃそのくらい」

「へっ！」

「何ビツクリしているんだよ。お好み焼きの粉の固さだよ。仕方ないなあ。俺も手伝ってやるよ。」

横から福原耕太が言ってプラスチックに手を突っ込んだ。

「よーし出来たらこのガーゼを一枚ずつその中へ入れて、清高が貼り付けた新聞紙の上に広げて貼り付けて行ってくれ。これを貼るのは女の子にやって貰うかな。ひとみ、そのガーゼを一枚ずつ清子に渡して、清子がプラスチックに浸して骨に貼る。次に直子が同じようにする。そしてヨシミと続いてやってくれるかい。判った？」

「はい」

スキーで骨を折って病院に入院していた僕のおじさんの足みたいなものが出て上がった。

「よーし、それでは清高と耕太とタカシでその骨の下側の土をとりのけるからね。そしてカズヤはその土を運ぶ。ほい、がんばれ。」

土がある程度無くなったとき、プロット先生の掛け声で僕たちはそれをひっくり返した。

そしておなじように化石にカバーをかけた。

「よーし出来た。タカシが発見者だからタツカシーサウルスと言う

名前にしよう。じゃタカシこのステッカーを貼って。」

先生から手渡されたステッカーには001と言う番号と、日付それにタツカシーサウルスと言う名前も書かれていた。

番号は新しい恐竜の最初に発見された骨と言うわけらしい。

「さあ、もう時間も無いから化石は博物館へ送ろう。キャシー今日はありがとう。」

プロット先生がキャシー先生にあいさつしたので僕たちも

「キャシー先生。ありがとうございました」と最敬礼をした。

僕たちが頭をあげると、そこにはキャシー先生はもういなかった。そして化石の半分はプロット先生のバックパックに飲み込まれているところだった。

「さあみんなのハンマーも僕のバックパックに入れてくれるかな。あつ忘れていた。」

先生があわてて言ったので僕たちもビックリ。

「先生、どうしたの？」

僕の口め。

「うん、お弁当を食べるのを忘れていたんだ。外で食べるとおいしいんだけど、仕方が無い学校に帰って食べよう。」

プロット先生は言って、何もかも飲み込んだバックパックを軽々と肩にかけてキャラバンカーへと歩き始めた。

第7話 恐竜を探しに行こうを終わります。

今回はいかがでしたか？せっかくお弁当を持っていったのにねえ。

作者は恐竜を掘る場所で食べるおにぎりが大好きです。

第8話 プロット先生ってだれ？

Drプロットの恐竜教室

Drプロット（ロバート・プロット）

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをかけている。

鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。
やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学・古生物学

舞台

岡の上小学校 6年A組

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

平賀和也

武田好

福原耕太

第8話 プロット先生ってだれ？

僕は岡の上小学校6年A組の毛利隆史です。

プロット先生の勉強が楽しくって毎週日曜日には予習の為に図書館へ行きます。でも僕はがり勉ではありません。どちらかと言うと勉強は嫌いな方です。成績だって体育以外はだいたい1か2。でも今は理科が一番好きです。

「おつ隆史、日曜日は図書館へ行く日じゃないのか？」

僕のお父さんが新聞を持って居間へ入ってきて食卓の前にドツカと座りながら言った。

「お父さん、トイレに新聞を持ち込むのはやめてと言ってるでしょ。」

台所からお母さんが背中越しに叫んだ。

「そつだよお、あとで読むときにいつもにおいが残っていて嫌だよ。」

僕もお母さんに同調して言った。

「判った判った、もうしないよ。」

お父さんは新聞を読みながらうるさい八工を追い払うしぐさで

「それより、早く図書館へ行け。」
と言った。

「いいんだよ今日は。明日の勉強はもう知っている事なんだから。」

「へー隆史が習うより前に知ってるなんて凄い事じゃないか。」

お父さんは新聞をたたんで、ビックリしたような顔で僕を見た。

「そりゃあ僕だって好きな勉強は先にやるさ。だって褒められるん

だもの。」

「そうかそうか、お前が勉強で褒められる事なんか無いからなあ。」
お父さんは変なところで感心した。
嫌な感じ。

「そうだ、その理科の先生って何て言う先生だったわけ？」

「プロット先生だよ。」

「どこから来たって言った？」

「えっ、そんな事知らないよ。でもイギリスで恐竜を探していたって言ってたような・・・」

「そうかイギリス人か。イギリスは昔から恐竜じゃ有名なものなあ。」

「えっお父さんそんな事知ってたの？」

「バカ言え、お父さんだって子供の頃は恐竜大好き人間だったんだぞ。大学の時留学して大英博物館も見に行ったよ。でっかい恐竜の骨を覚えているぞ。」

「あっそれディプロドカスだよ。入ったらすぐにある奴。」

「おっ知ってるのか。隆史凄じじゃないか。」

お父さんが感心して言った。

「何言ってるのよ、わたしの子供でしょ。」

お母さんが台所から又言った。

「おいグダグダ言わないで早く飯にしろ。」

お父さんが顔を曇らせて叫んだ。

「そうだよ、お母さん早くしてよ。おなかペコペコ。」

「そうかそうか、お前もおなかペコペコか、いっぱい食べて、いっぱい走り回って元気な子で居てくれよ。勉強なんて程ほどでいいんだからな。ところでそのディプロ何とかって言うのは肉食うのか？」

「な〜んだ、そんな事しないの？ディプロドカスはハービボ〜なんだよ。」

「なんだそのハービ〜ってのは？」

「ハービ〜じゃなくてハービボ〜。ハービボ〜ってのは草食恐竜

の事を言うんだよ。ディプロドーカスは長い首で高い木の葉っぱなんかを食べる恐竜だよ。」

「へ〜そうか、ハービボーって言うのか。お前は凄いなあ。プロット先生って凄い先生なんだなあ。」

「そうだよ。でもね、汚いバックパッカー一つだけしか持ってなくて、毎日同じものを着てるんだ。頭はハゲてるし、耳の上に縮れ毛がタワシみたいにくつついていて、最初はこじきかと思ったんだ。」

「なんだい、バックパックだけで生活してるってのは、じゃあ風呂も入らないのか？」

「ううん、校長先生がホームステイ先を探してあげたから、この頃にはおいも無くなったよ。」

「あっそうだ、ちよつと待ってる。」

お父さんは何を思い出したのか新聞を横において立ち上がって部屋を出て行った。

しばらくして

「じゃ、これ先生にやってくれ。」

と言って、新しいバックパックを僕のひざの上に投げた。

「え〜これ凄いじゃん。ビラボンだよ。」

アーミー模様のバックパックは少し大きめで色んな所に多くのポケットが付いている。肩からかけるベルトには携帯用のポケットまで付いているし、両サイドにはメッシュの飲み物ホルダーがある。

「ああ、買ってから一回だけ使っただけど、もう使うことなんて無いから先生に使ってもらえ。」

「凄いや、お父さんありがとう。僕も欲しいぐらいだよ。きっと先生も喜ぶよ。」

「おうそうだろうよ。まあ学校嫌いのお前を変えてくれたんだから、そのくらいはお礼をしなくっちゃな。」

翌日の月曜日は少し早めに家を出た。だって普通のカバンにでっかいバックパックも持たなくっちゃならないからだけれど、何で二つ

もバッグを持っているのか友達なら聞くじゃない。それを一々説明するのがわずらわしいじゃないか。

「あれっ隆史。凄いバックパックを持つてるじゃないかよお。」

嫌な奴が一番に見つけやがった。平賀和也はうるさい奴じゃないんだけれど、いつも僕を見下ろして話すから嫌なんだ。

「うん、親父が先生にやれってさ。」

「なくんだ。先生ってプロット先生だろう。それより俺にくれよ。うるさい奴だなあ。触るなよ。」

「駄目に決まってるじゃないか。お前なんかにもつたいないよ。」
「ふんだ。」

「おはようございませす。」

朝のあいさつでみんなが席に着いた。

「先生！」

僕、毛利隆史が叫んで立ち上がった。

「おっ、タカシ。なんだい？」

出席簿から目を上げてプロット先生が言った。

「親父が先生にこれをやれって言ったんだ。」

僕はバックパックを高く上げて言った。

「あんた馬鹿だね。先生に物をあげる時はコソツとあげるんだよ。」

そしてやれって言ったって言うなんて失礼よ。目上の人には差し上げるって言うのよ。」

横で清子が顔をしかめて言った。

「そうだよタカシ。日本語をもっと勉強しなくっちゃいけないね。」

清子の言うのが正しいよ。」

プロット先生が近づいて来て言った。

「どれどれ、おっ！いいバックパックだね。これ欲しかったんだ。」

この前ホームステイ先のパパさんが車でスポーツ用品店へ連れて行ってくれた時にビラボンのこれを見てて気に入ってたんだ。本当に貰っても好いのかい。」

「だって親父が持つて行けつて言つたんだからいいんだよ。でもちよつと大きいかなあ。」

「だいじょうぶ。僕のバックパックは小さいから。」

プロット先生は言いながら中指と親指でパチンと音を立てた。そうしたら、先生の黒いバックパックがゆっくりと僕達の頭の上を飛んできて、新しいバックパックの中へ入っちゃった。

「じゃ貰つておくよ。あとで先生がお父さんにお礼を言つておくからね。タカシありがとうね。」

僕達がポカーンとしている間にプロット先生は教壇に戻った。

「さあ授業を始めようか。今日は何を勉強するんだつたつて？」

「先生。それよりかさ、きのう親父に聞かれたんだけれど先生つてどこの人ですか？」

「そうそう、わたし達、先生の事なにも知らないのよ。話してよ。」横から清子がしゃばつて言った。

「あつそうか、そう言えば、誰にも言つてなかつたつて。校長先生には聞かれたから言つただけけれど、別に隠していたんじゃないよ、ごめんね。じゃあ少し長くなるけれど今日は先生の事と恐竜達の話しよう。まず僕はイギリス生まれのイギリス人だよ。イギリスつて国はわかるかい？」

「はい」

全員が口を揃えて返事をした。

「そう、じゃ、僕は英大博物館のキュレーターだつたんだ。でもね今から見ると随分と昔に生まれててね、恐竜の発掘現場でこのバックパックを枕にして寝ていたんだ。昼寝だつただけどぐつすり寝たんだらうね。起こしに来たのが校長先生でさ、ビックリしたよ。だつて校長先生の家の玄関で寝ていたんだから。校長先生もビックリしただらうね。そうして色々聞かれて、僕は英大博物館のキュレーターで恐竜学を勉強していると云つたら、この学校の先生をやらないかと言われたんだ。でも変だね。僕は日本語なんて勉強した事も無いのにしゃべれるようになっていたんだよ。」

「へ〜いいなあ。」

「そう、いいだろうタカシ。」

「先生、どうして発掘現場から日本へ来たのですか？」

「ヒトミちゃん、それは先生にも分からないんだ。ただ昼ねしていただけないんだよ。ま、その前に色々気に入らない事がたくさんあってね。あんまり仕事をする気になっなくなっていなくてねえ。」

「何が気に入らなかったの？」

「うん、先生が大きな恐竜の足の骨を見つけたんだけど、教会の偉い人達がね、神様が創ったものが滅びる筈が無いと言って、それは大男の骨だなんて言うんだよ。そんな5mも背がある大男なんていないよねえ。」

「先生、それっていつごろの事ですか？」

「そうだね1677年頃だったかなあ。僕が37歳だから。」

「へ〜先生ってそんなにお年寄りだったんだ。」
僕が叫んだ。

「今は何年かなあ？」

「2008年で〜す。」

「えっそんなになるのかい。参ったなあ。」

「どうして〜」

「まあ、先生もこんがらがって、頭を整理するから急がせないでね。」

「プロット先生は息をついて言葉を続けた。」

「先生の名前は最初に言ったよね。ロバート・プロットだよ。でも僕は1640年に生まれているんだ。そして博物館で働き始めてから1677年に、さっき言った様に大きな骨を見つけてね。色々キリスト教会から文句を言われて、ちょっと嫌になっていたんだ。でね、恐竜の化石を掘りに行ってきま〜すって発掘現場へ行ってお昼寝していたんだ。」

「そ〜したら、先生って何歳なんですかあ」

島津直子が、すっとなきような声で叫んだ。

「馬鹿だなあ計算すればいいじゃないか。」

「ふん、偉そくに、じゃ何歳よ？」

「331歳だよ。」

横から清隆が助け舟を出してくれた。

「おーそうか331歳か。すごいね」

「先生、なに感心しているんだよ、これって変だよ。まるでタイムマシンに乗って来ているみたいじゃない。」

またまた僕の口が勝手にしゃべる。

「あつ、それなら、先生のバックパックがタイムマシンじゃないのかな。」

清隆が言ったので僕はハツとして清隆を見た。

そうか、そうなんだ。そうしたらバックパックの中の不思議も判る。

「よしよし、まあ先生の歳を数える事なんか後回しにして、もう少し話をしよう。恐竜・ダイナソーって言葉が作られたのは先生が生まれてからずーっと後の事なんだ。イギリスの外科医のリチャード・オウエンが、2つのギリシャ言葉をくつつけて作ったんだ。一つはテリブル(Terrible)で恐ろしいとか変なとか言う意味のDeinos。もう一つはリザード(Lizard)でトカゲを意味するSaurusだよ。だからそれらをくつつけてダイナソー(Dinosaur)になったんだよ。それで先生が見つけた骨はイグアナドンの大腿骨だと言う事になったんだよ。」

プロット先生が黒板に書きながら行った時、清子が立ち上がって言った。

「先生！それって変じゃない。だって先生は1677年頃からここへ来ているんでしょう。だったら1830年頃の事なんて知っている筈ないでしょう。」

「おつ清子、いい事を言うねえ。でも変じゃないんだよ。校長先生の玄関で寝ている間に先生の頭の中は計算機が力チャ力チャ廻るよ。うに数字や歴史が動き回っていてね、何故か知らない内に全部判っちゃったんだよ。」

「いいなあ、勉強しなくつても、ぜんぶ判っちゃうなんて。僕も校長先生の玄関で寝てみようかな。」

「こらこら僕の口め！勝手に何を言い出すんだ。」

「そうね、隆史も寝てみるともつと勉強が出来るようになるかも知れないわよ。」

清子がからかうように言ったので、僕は頭に来て睨み付けてやった。
くそ

「ははは、じゃ、みんなにもわかるように恐竜達を並べてみよう。」

プロット先生はバツクパツクの中へテイラノサウルスを突っ込んでチヨークを一本取り出した。ポイツと空中に軽く投げるとチヨークは黒板へ飛んで行き、真ん中に端から端まで一本の線を引いた。

何だろうと見ている内にその線が前にせり出してきて長いテーブルが黒板にくっついているようになった。

「じゃ三畳紀の頃からしよう。」

プロット先生が言ってバツクパツクの中から小さな恐竜達を出してそのテーブルの左端に置いた。

「さあこの恐竜達の名前を言えるかな？」

「はい」

僕の口が勝手に返事をして、右手が勝手に上がった。

こらこら僕はそんなの知らないよ。どうしよう。

「よし、タカシ言ってこらん。」

先生の言葉に僕は立ち上がったって、えっ、なんで？

「はい、プロサウロポッドとコエロファイシス、それにプラトサウルスです。」

「すっごーい」

「さすが恐竜博士だ」

「よしよしタカシすごいぞ。」

先生が言う前にみんなが叫んだ。

ふふん、どんなもんだい、って、僕じゃ無いよ

「じゃあ次に」

と言ってプロット先生は同じように恐竜達を出してテーブルに並べた。

バルカノドン、ヘテロドントサウルス、アンキロサウルス、メガロサウルス、ヒュアンゴサウルスだ。

またまたチヨークが勝手に飛んで行って数字を書き始めた。先の恐竜達との間に縦線を入れて208myaと書き、今度の恐竜達の後ろに175myaと書いた。

「myaと言うのはミリオン・イヤーズ・アゴの省略で100万年前と言う意味だよ。さて、先の恐竜達は三畳紀の後ろの方で生きていたんだけど、今度のはジュラ紀の前期から中期にかけて生きていた恐竜だよ。こら動くな！」

プロット先生は僕達に説明をしていたが、恐竜たちがゴソゴソと動き出したので恐竜をどなった。ビクワリした恐竜達はビクツとしてから静かになった。

チヨークは154myaと書き、144myaと書いた所で又縦線を入れた。

そこへプロット先生は又バックパックから恐竜達を取り出して並べ始めた。

首の長い竜脚類でしっぽに4本の棘があるスノサウルス、パタゴサウルス、アロサウルス、それに首としっぽがすごく長いアパトサウルスやディプロドカス、そして背中やしっぽにたくさん棘を持っているステゴサウルス。そうして鳥みたいなアーカエオプテリクスを並べた。

「さあ、ここまでがジュラ紀だよ。名前はチヨークが書いてくれるからみんなはノートに書いておく事。いいね。」

「はい」

みんな返事をしたが、それよりか先にみんなは絵を書いて名前を書き写している。

チヨークは忙しそうに黒板を飛び回って恐竜の名前を書いている途中から、次の数字を書くところへ飛んで行った。今度は99mya

と65myaとだけ書いて元の名前書きに戻った。

次にプロット先生が出したのはイグワナドンだ。先生が一番最初に見つけた恐竜だ。

「そう、タカシよく覚えているね。これが先生が見つけた恐竜なんだよ。みんなも覚えていてね。」

へっ？僕は何も言っていないし、考えながらノートに書き写していただけなのになあ。

でも、まあいいか。

ほめられるのは悪くはないからなあ。

プロット先生は続けてアンキロサウルスのミンミ、ディノニクス、ノドサウルス、トロードン、頭にツノが3本生えているトリケラトプス、そして最後にティラノサウルスを並べた。

「さあこれで最後だよ。この65myaというのが恐竜達の最後の年でKT境界と呼ばれているんだ。さあみんなノートに書けたかな。」

プロット先生が言った時、最後に出てきたティラノサウルスが大きな声で吠えた。今まで大人しくしていた恐竜達がビツクリしてキョロキョロ周りを見回した。

もう一度ティラノサウルスが吠えた時には、全ての恐竜達が先生のバツクパツクの中へと走り込んで行った。

「バカ、みんなをビツクリさせちゃ駄目じゃないか。」

と、プロット先生がティラノサウルスの頭をゲンコで軽く叩くとティラノサウルスはシュンと大人しくなつて先生につままれてバツクパツクの中へ入れられた。

「さあ、今日の恐竜達を恐竜新聞に絵を書いて載せておいてね。判つたねタカシ。じゃ今日の授業はおしまだよ。」

第9話 恐竜の歯（前書き）

今回は恐竜達の歯を勉強しようね。

第9話 恐竜の歯

Drプロットの恐竜教室

Drプロット（ロバート・プロット）

容姿

ハゲ頭でトンボメガネをかけている。

鼻の下には太くて長いヒゲをはやしている。

やせて、背が高い。

教科

理科

専門

恐竜学・古生物学

舞台

岡の上小学校 6年A組

生徒

毛利隆史

大内清子

加藤清高

島津直子

多古弘子

菊池ひとみ

平賀和也

武田好

福原耕太

第9話 恐竜の歯を勉強しよう。

「今日のお勉強は恐竜の歯だよ」

プロット先生が出席簿を仕舞いながら言った。

「えっ葉？葉っぱ？」

こらこら僕の口め、勝手にしゃべるな。はって言ったら歯しかないじゃないか。

僕は岡の上小学校6年A組の毛利隆史。クラス仲間には恐竜博士なんて呼ばれています。

でも変なのです。プロット先生の授業になると僕の口は勝手にしゃべりだすんです。

「そうだね、タカシみんなを笑わせようだったって駄目だよ。はって言ったら歯の事だよねえ。英語で言つとトウースだね。」

「あれっ先生、歯ってティースじゃなくい。」

横の席から大内清子が叫んだ。

ふんだ、ちよつと勉強が出来るからって偉そうに・・・今は英語の勉強じゃないんだぜ。

「そうだね。キヨ子の言うのも歯、僕の言うのも歯。僕が言ったのは一本だけでキヨ子が言ったのは2本以上の歯の事だよ。よしよしタカシそんなにすねないで、じゃあ歯の勉強に今日はこのクルーを使おう。」

先生が言いながらバツクパツクのチャックを開けて20センチぐらいの恐竜のおもちやを出した。

「さあこの恐竜は何という名前だろう。」

「はい、ステゴザウルスです。」

先生が全部しゃべる前に僕が答えた。本当だよ。口が勝手にしゃべったのでは無いんだよ。

「おっ、さすが恐竜博士だなタカシは。」

エツヘン、どうだ、こらこらみんな拍手は、拍手はどうしたの・・・

「なんだよ偉そうに。そんなの見りゃ誰だって判るじゃないか。」

後ろの席で平賀和也が席を踏ん反り返らせて僕に聞こえるように言った。

「はいはいはい、じゃあみんな教室の真ん中を少し開けてくれるかな。そう、机を窓とローカの方へ寄せて。そうそう」

先生に言われて僕達はガタガタゴトゴト机と椅子を引っ張って教室の真ん中でダンスが出来る程の空間を作った。

「出来たね、じゃあ君はここへ降りてつと。」

先生が部屋の真ん中に恐竜を置いた時にはおもちゃだった恐竜が生返って1メートルぐらいの大きさになっていた。

でもその恐竜は寝たまま。そして少しずつ大きくなっている。ま、僕達は慣れていくけれどね。

5メートルぐらいの大きさになったとき

「じゃ、もういいだろう。」

と先生が言った。と同時に島津直子が恐竜の鼻先をペチャペチャと叩いて

「早く起きなさいよ。いびきがうるさいじゃないの。早く起きなさいよ。」

ペチャペチャ、パチパチ

「う・・・ん、おはようママ」

恐竜が直子を見て言った。

「何言ってるの、わたしはあなたのママじゃありません。」

どうしたんだよ、いつもはあんなに怖がっている直子が・・・

「今日の恐竜は怖くないのかい、直子。」
と僕が聞いた。

「うん、だってうちのミッキーに顔が似ているんだもの。かわいい」

「あんとこのはセパードでしょう、似てないわよ。」

好が後ろの方から叫んだ。武田好は好と書いてヨシミって呼ぶんだ。

「似てるわよ。」

「似てないよ」

こらこら

ステゴサウルスがセパードに似ていようがチンクに似ていようが、そんなことどうでも好いじゃんか。

「プロット先生、このうちわみたいな背中の中なら敵が攻めて来た時、しっぽの棘で突き刺したり背中の中なら棘で突き刺したりで襲われな
いよね。」

僕がうるさい女子の言葉をさえぎってやった。

「おつタカシ良いことを言うね。そうだね、科学者は君が言うみたいに考えたのだよ。」

プロット先生があご髭をしごきながら続けて言った。

「さてステゴサウルスって名前は前にも説明したとおり屋根トカゲと言っ意味だったよねえ。まあ最初にこのプレートが発見された時、屋根に使うスレートパネルみたいに思ったのでこんな名前になったそうだよ。このプレートは骨の一部分だけと見てこらん上に薄い皮膚があるだろう。」

プロット先生に言われて良く見ると硬い皮膚みたいだ。

ステゴサウルスが右に廻りだして窓と平行に身体を向けなおした。

「あっプロット先生、この棘の色が少しピンク色になってきました。」

「弓削亜沙美が小さな声で言った。」

「どことどこ」

僕は亜沙美のそばへ行った。

「あつ、本当だ。先生、ここ、ほれ、ねっ。」

「そう、ステゴサウルスの棘は太陽の光を受けて体温の調節をするんだよ。体温が上がると血の巡りが良くなるから色が赤くなるんだね。暑くなったら今度は太陽の方向に頭がお尻を向けるよ。そうしたら直接熱を受けないから少しづつ体温が下がるんだよ。」

プロット先生が説明してくれた。

「じゃあステゴサウルスは太陽に向かって横に向いた時は頭が良くなるんですね。」

和也が後ろの席から叫んだ。

「ははは、そうだねえカズヤ、面白いところに気が付いたね。脳への血もたくさん廻るだろうねえ。」

プロット先生が笑いながら言った。

「じゃあ隆史も毎日窓際で横向きに居ればいいんだ。少しは頭が良くなるぜ。」

あつたまに來たなあ。僕は立ち上がって和也をにらみつけてやった。

ステゴサウルスは足をバタバタ踏んで大きなあくびをした。

多古弘子がそれを見逃さないで口の中を覗いた。でももう少しでステゴサウルスに咬まれるところだった。

「あく助かった。カーナボーじゃあ無いと判つていても大きいから怖かった。」

弘子は大きくため息をつきながら言葉をつないだ

「でもプロット先生、ステゴサウルスには歯がありませんでした。」

「そんな事無いよ。ステゴサウルスには歯があります。じゃあ見てごらん。」

プロット先生がステゴサウルスの頭を軽く下から持ち上げるように

してあごの下をくすぐってやると目を細めて気持ちよさそうにしている。

「グッバイ、ステゴサウルス君。」

プロット先生が言った瞬間に骨になった頭だけが残って身体全部が消えてしまった。

「よく見てごらん。ここにちゃんと歯がはえているだろう。」

先生が上アゴを持ち上げて口の奥の方に並んでいる歯を見せてくれた。でも前半分ぐらいはクチバシみたいだ。

「前のクチバシみたいな所で葉っぱなどを引きちぎって奥歯で噛み砕いて飲み込むんだよ。」

「へ〜」

僕は前の亜沙美を押しつけて口の中を覗きこんだ。

「恐竜達はそれぞれ食べ物に合うような歯を持っていたんだよ。食肉種のカーニボーはこれとは全く違う歯の形をしているんだ。じゃあタカシ、先生は頭を持っているから手が離せないのだから僕のバックパックの前のポケットに一本歯が入っているから出してくれるかい。」

「言われて僕は教壇の横まで行って置いてあったバックパックのチャックを開けた。前のポケットって言ったって4つもあるじゃん。あれ、ここには無いや。ここも無し、何だこの変なのは。こっちな無いなあ。やっぱりこれかな。」

「先生、歯はありません。でもこんなのが有りました。」
松ポックリを少し薄くして角にのこぎりみたいにギザギザのある物だ。

「あっそれぞれ。持ってきて。」

先生が言うので又亜沙美を押しつけて先生に手渡した。

亜沙美の腕って柔らかい。いい臭いもするし。惚れちゃおうかな。

「さあこれが恐竜の歯だよ。凄いだろう、どんな種類の恐竜の歯かわかるかな？」

「そんなのこぎりみたいな歯なら、ぜったいにカーニボーだよね。」
「そうだよ、そうだよ。」

みんなが僕の言葉にうなずいて口を揃えて言った。

「さあ、どうか。じゃあタカシが言うようにカーニボーの歯ならどうやって食べるかわかるかな？」

先生が言った途端に直子が、

「こつやるのよ。」

と言って、大きな口を開けて僕の腕をくわえ、両横に振った。

やめるよ、やめる。服が破けるじゃないか。

「ははは、どうかなあみんなはどう思う？」

プロット先生が髭をしごきながらみんなを見回して聞いた。

「噛み切るんだよ。」

僕が言った。

「そうね、のこぎりの歯みたいだから、一回咬むだけで肉なんか切れちゃうわよね。」

亜沙美が僕を見ながら笑顔で同意してくれた。うれしいなあ。僕の好みなんだ。

「ステーキナイフだつてのこぎりみたいな歯が付いているよ。」

「そうだね。」

「わたしお腹すいた。」

武田好が叫んだ。

「ははは、ヨシミは食いしん坊だな。じゃ、もう少しほかの恐竜達の歯も勉強してみようね。キヨ子が一番近いね、僕のバックパックの前ポケットに入っている歯を全部出してくれるかい。」

プロット先生は笑いながら言った。

えっ！さっき僕が見た時、この歯だけしか入っていなかったよ。

ガサゴソかき回していた清子が両手にいっぱい歯を持って床に並

べた。

へっ？どうなってんだろう。まあいいか……

「さあ、よく見てごらん。この長い歯はね、ディプロドクスの前歯だよ。」

プロット先生がたくさん歯の中から一番長いのを持って僕達に説明してくれている。

ディプロドクスは熊手みたいな歯で木の葉っぱを枝から集めて口の中へ放り込んで咬まないで飲み込んだって。

へへそんな食べ方するとお母さんに叱られちゃうけどなあ。

あっそうだ。和也の前歯は同じように大きくて前に飛び出してるから、あいつはこうやって食べてるのかな。ふふふ……

「さあ、さっきの歯はプラティオサウルスの物なんだよ。彼等はディプロドクスと違ってこの奥歯で葉っぱを小さく切って飲み込むんだ。だからさっきナオコの言ったのはうそ、わかった？」

そーら見る。直子め！僕の服を噛みやがって。

「この大きなどんぐりの様なのはモササウルスの歯だから今はいいか。」

プロット先生は言いながらバックパックのポケットに戻した。

「カーニボアの歯はこっちだよ。」

と言ってプロット先生が手に持ったのは、先っぽが尖っていてバナナみたいに反り返っている10センチより大きめの長さの歯だ。

「こうやって内側に反り返って生えていてね、一度噛み付いたら離れないようになってるんだよ。そうしてそれからナオコが言ったように強い首の筋肉で振り回して殺しちゃうんだよ。」

「そーらみなさいよ。やっぱりカーニボーはわたしの言ったとおりでしょ。」

直子が誇らしげに僕に向かって言った。

なんで僕に言うんだよ」

「さあこれはちょっと面白いよ。」

プロット先生はバックパックの後ろ側のポケットから板みたいなのを出した。

裏返して見せてくれた面には数え切れない程の歯がついていた。

「これはね、エドモントサウルスの下あごなんだよ。見てごらん、500本以上の歯があるだろう。彼等はコーンや固い木の実をこの歯で砕いて食べていたんだろうね。もっとよく見てごらん。小さいのや大きいのが色々あるだろう。」

どれどれ、僕は身体を乗り出してのぞきこんだ。

「プロット先生、それって新しいのが生えているんですか？」

「おつタカシ、よく判ったね。そうなのだよ、恐竜の歯は抜けるとすぐに次の歯が生えて来るんだよ。」

「え〜いいなあ。わたしもそうならないかなあ。」

プロット先生の言葉が終わる前に横の清子が叫んだ。

「そうか清子も強い女の子だけど歯医者さんが嫌いなんだなあ。」

「そうなんだ。キヨ子は歯医者さんが嫌いなのか？ちょっと口を開けてごらん。おつおつ、虫歯だらけじゃないか。ちゃんと歯を磨いているかい？」

プロット先生が言ったので、僕がプツツと笑ったから、清子はふくれっつらで僕をにらんだ。

「さあ、みんなも隣の友達の歯を見て。噛み付く歯と、噛み砕く歯とあるだろう。これはね君達はハービボーやカーニボーじゃあないと言う証拠だよ。」

「じゃ、僕達は何なのですか？」

「そうだね。わたし達はオムニボーと言って何でも食べる動物なんだよ。」

「そうだ、隆史は何でも食べるから、これからオムニボーと呼ぼう

ぜ。」

和也が叫んだ。

頭に来るなあ。今度から奴はディプロって呼んでやろう。そこで授業終わりのチャイムがなった。

「さあわたしは早昼を食べよ」と。

ヨシミが叫んだ。

ハイ、今日はおしまい。

どう？楽しかったかい？

君達も虫歯にならないように歯を磨くんだよ。判った？

じゃあプロット先生も今から歯を磨いてくるからね。バイバイ。

第9話 恐竜の歯（後書き）

今回からは新しいお友達、弓削亜沙美ちゃんが増えましたよ。これからも一緒に遊んであげてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980c/>

Drプロットの恐竜教室(短編集)

2010年10月11日04時10分発行